

南あわじ市埋蔵文化財調査報告書 第18集

九 蔵 遺 跡 I

— 基盤整備促進事業（東沖田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査（2・4次調査）報告書 —

2020年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

はじめに

南あわじ市では、このたび基盤整備促進事業（東沖田地区）に伴う九歳遺跡の埋蔵文化財調査の成果を発掘調査報告書として刊行する運びとなりました。

まだまだ調査結果の公開が不十分な状況ですが、今後も文化振興活動の一環として、郷土の歴史や文化を学ぶための環境づくりを進め、文化財保護の更なる理解に努めていく所存ですので、御支援賜りますようよろしくお願いいたします。

本書を作成するにあたり、御指導御協力いただいた方々に対し、心よりお礼申し上げます。

南あわじ市教育長 浅井 伸行

例 言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市阿万東町に所在する、九歳遺跡2・4次調査の発掘調査報告書である。
2. 2・4次調査（平成17・18年度）は、基盤整備促進事業に伴い、南あわじ市教育委員会が実施した。発掘調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・谷口栞が担当した。
3. 発掘調査時の写真撮影は山崎・谷口が行った。平面・層序図等の実測作業は山崎の指示を受けて、宇治田力・筒井健司が行い、デジタルトレースを白川裕二が行った。遺構の掘削作業等は、南あわじ市シルバー人材センターに委託した。
4. 出土遺物の整理作業については第1章に記す通りであるが、遺物の実測作業については山崎・谷口が、デジタルトレースは白川が行った。遺物の写真撮影は山崎が行った。
5. 本書の執筆と編集は山崎が行った。
6. 当調査に関わる写真や実測図面等の資料は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所で保管している。
7. 発掘調査にあたり、兵庫県教育委員会・南あわじ市シルバー人材センター・佐藤重聖・島田豊彰・関真一・藤本史子・森岡秀人・森島康雄（敬称略）の諸機関と個人から御協力や御指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。
8. 凡例は下に示す通りである。
 - ・本書に記される標高は東京湾平均海水準を基本とする。
 - ・各調査区の平面図の方位は磁北を示す。
 - ・層序図の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究会監修）を参照した。
 - ・遺構番号は調査時、調査区毎に遺構の種類によらず1から通し番号を付したもので、本書では報告・編集上必要な番号以外は割愛した。遺構は可能な限り柱穴・土坑等の言葉に改めたが、性格の明らかでないものはそのまま遺構とした。
 - ・本書収録の遺物は、ゴシック体で通し番号を付した。
 - ・土器実測図の断面は、縄文土器・弥生土器・土師器・土製品が□、黒色土器が■、輸入・施釉陶磁器が□、瓦器・瓦質土器が■、須恵器・国産陶器が■とし、縮尺は土器・土製品が1/4、石製品が1/2・1/4、鉄製品は1/2、木製品は1/4と1/5とした。

本文目次

はじめに

例 言

第1章 調査の経緯と経過 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

第3章 調査成果

第1節 A地区	7
第2節 B-1地区	11
第3節 B-2地区	14
第4節 B-3地区	25
第5節 B-4地区	27
第6節 B-5地区	38

第4章 総括

第1節 縄文時代	40
第2節 弥生時代	40
第3節 律令期	40
第4節 中世	41

挿図目次

図1 調査区設定図 (S=1/4,000)	2	図34 B-2地区 包含層出土遺物3 (S=1/4)	24
図2 南あわじ市の位置	3	図35 B-3地区の位置	25
図3 淡路島南部の地形と調査地の位置 (S=1/400,000)	3	図36 B-3地区 香灰層序図 (S=1/80)	25
図4 調査地周辺の道路 (S=1/25,000)	4・5	図37 B-3地区 平面図 (S=1/200)	
図5 A地区の位置	7	上杭5 平面・層序図 (S=1/20)	25
図6 A地区 南東壁層序図 (S=1/80)	7	図38 B-3地区 遺構出土遺物 (S=1/2・1/4)	26
図7 A地区 平面図 (S=1/200)	7	図39 B-3地区 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)	26
図8 A地区 建物1・2		図40 B-4地区の位置	27
平面・断面・層序図 (S=1/100)	8	図41 B-4地区 平面図 (S=1/200)	27
図9 A地区 遺構出土遺物1 (S=1/4)	8	図42 H-4地区 北東壁層序図 (S=1/80)	28
図10 A地区 遺構出土遺物2 (S=1/4)	9	図43 H-4地区 建物5	
図11 A地区 包含層出土遺物1 (S=1/4)	9	平面・断面・層序図 (S=1/100)	29
図12 A地区 包含層出土遺物2 (S=1/4)	10	図44 B-4地区 建物6 平面・層序図 (S=1/100)	29
図13 B-1地区の位置	11	図45 B-4地区 建物7 平面・層序図 (S=1/100)	30
図14 B-1地区 南西・南東壁層序図 (S=1/80)	11	図46 B-4地区 建物8 平面・層序図 (S=1/100)	30
図15 B-1地区 平面図 (S=1/200)	11	図47 B-4地区 建物9・10	
図16 B-1地区 建物3 平面・層序図 (S=1/100)	11	平面・断面・層序図 (S=1/100)	31
図17 B-1地区 建物4		図48 B-4地区 建物11・12	
平面・断面・層序図 (S=1/100)	12	平面・層序図 (S=1/100)	31
図18 B-1地区 遺構出土遺物 (S=1/2・1/4)	12	図49 D-4地区 遺構出土遺物1 (S=1/4)	32
図19 D-1地区 包含層出土遺物1 (S=1/4)	12	図50 B-4地区 遺構出土遺物2 (S=1/4)	33
図20 D-1地区 包含層出土遺物2 (S=1/4)	13	図51 B-4地区 遺構出土遺物3 (S=1/4)	34
図21 B-2地区の位置	14	図52 B-4地区 遺構出土遺物4 (S=1/4)	35
図22 B-2地区 南東壁層序図 (S=1/80)	14	図53 B-4地区 包含層出土遺物1 (S=1/4)	36
図23 D-2地区 平面図 (S=1/200)	15	図54 B-4地区 包含層出土遺物2 (S=1/4)	37
図24 B-2地区 井戸10a・10b		図55 H-4地区 包含層出土遺物3 (S=1/4)	38
平面・層序図 (S=1/40)	15	図56 H-5地区の位置	38
図25 B-2地区 土坑9 平面・断面図 (S=1/20)	16	図57 H-5地区 北東・南東壁層序図 (S=1/80)	38
図26 H-2地区 遺構出土遺物1 (S=1/4)	16	図58 H-5地区 平面図 (S=1/200)	39
図27 D-2地区 遺構出土遺物2 (S=1/4)	17	図59 H-5地区 柱列 (S=1/100)	39
図28 B-2地区 遺構出土遺物3 (S=1/4・1/5)	18	図60 H-5地区 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)	39
図29 H-2地区 遺構出土遺物4 (S=1/4)	19		
図30 H-2地区 遺構出土遺物5 (S=1/4)	20		
図31 H-2地区 遺構出土遺物6 (S=1/4・1/5)	21		
図32 H-2地区 包含層出土遺物1 (S=1/4)	22		
図33 H-2地区 包含層出土遺物2 (S=1/4)	23		

写真図版目次

- | | | | |
|--------|---|--------|--|
| 写真図版1 | 上段：調査地近景（南東より）
中段：調査地近景（北より）
下段：調査地近景（東より） | 写真図版12 | 上段：B-2地区 包含層出土遺物
中段：B-2地区 包含層出土遺物
下段：B-2地区 包含層出土遺物 |
| 写真図版2 | 上段：A地区 全景（北より）
中段：B-1地区 全景（北西より）
下段：B-1地区～兵庫県教育委員会5区
建物3（南東より） | 写真図版13 | 上段：B-2地区 包含層出土遺物
中段：B-2地区 包含層出土遺物
下段：B-2地区 包含層出土遺物 |
| 写真図版3 | 上段：B-2地区 南西部（北東より）
中段：B-2地区 北東部（北東より）
下段：B-2地区 上坑9（南西より） | 写真図版14 | 上段：B-2地区 包含層出土遺物
中段：B-2地区 包含層出土遺物
下段：B-2地区 包含層出土遺物 |
| 写真図版4 | 上段：B-2地区 井戸10a・10b（東より）
中段：B-2地区 井戸10a（西より）
下段：B-2地区 井戸10b（西より） | 写真図版15 | 上段：B-3地区 遺構出土遺物
中段：B-3地区 遺構・包含層出土遺物 |
| 写真図版5 | 上段：B-3地区 全景（南より）
中段：B-3地区 土坑5
遺物出土状況（西より）
下段：B-4地区 南東部（南東より） | 写真図版16 | 上段：B-4地区 遺構出土遺物
中段：B-4地区 遺構出土遺物
下段：B-4地区 遺構出土遺物 |
| 写真図版6 | 上段：B-4地区 中央部（南東より）
中段：B-4地区 北西部（北西より）
下段：B-5地区 全景（南より） | 写真図版17 | 上段：B-4地区 遺構出土遺物
中段：B-4地区 遺構出土遺物
下段：B-4地区 遺構出土遺物 |
| 写真図版7 | 上段：A地区 遺構・包含層出土遺物
中段：A地区 包含層出土遺物
下段：A地区 包含層出土遺物 | 写真図版18 | 上段：B-4地区 遺構出土遺物
中段：B-4地区 遺構出土遺物
下段：B-4地区 遺構出土遺物 |
| 写真図版8 | 上段：B-1地区 遺構・包含層出土遺物
中段：B-1地区 包含層出土遺物
下段：B-1地区 包含層出土遺物 | 写真図版19 | 上段：B-4地区 包含層出土遺物
中段：B-4地区 包含層出土遺物
下段：B-4地区 包含層出土遺物 |
| 写真図版9 | 上段：B-2地区 遺構出土遺物
中段：B-2地区 遺構出土遺物
下段：B-2地区 遺構出土遺物 | 写真図版20 | 上段：B-4地区 包含層出土遺物
中段：B-4地区 包含層出土遺物
下段：B-4地区 包含層出土遺物 |
| 写真図版10 | 上段：B-2地区 遺構出土遺物
中段：B-2地区 遺構出土遺物
下段：B-2地区 遺構出土遺物 | 写真図版21 | 上段：B-4地区 包含層出土遺物
中段：B-5地区 遺構・包含層出土遺物 |
| 写真図版11 | 上段：B-2地区 遺構出土遺物
中段：B-2地区 遺構出土遺物
下段：B-2地区 遺構出土遺物 | | |

第1章 調査の経緯と経過

旧南淡町農林水産課により基盤整備促進事業（東沖田地区）が計画され、平成15年度に旧南淡町教育委員会を調査主体として分布調査が行われた。平成17年に旧三原郡4町が合併すると、事業は南あわじ市に引き継がれることになった。

分布調査の結果を基に、平成17・18年度に確認調査（1・3次調査）を行った。（註1・2）。この確認調査の結果に基づき、事業で影響を受ける範囲について記録保存を目的とし、平成17・18年度に本発掘調査（2・4次調査）を行うことになった。今回報告を行うのは2次調査のA地区とB-1地区、4次調査のB-2～5地区で、2次調査のC-1・2地区は5次調査以降の成果とあわせて、改めて報告することとした。

それぞれの本発掘調査については、同年度内に基本的な整理作業を終えた。平成30・令和元年度には報告書発行に向けて、原稿の作成や編集作業を行っていた。

・分布調査

調査期間 —— 平成16年3月11日～19日
 調査面積 —— 約16ha
 担当者 —— 旧三原郡広域事務組合教育委員会 定松住重・的崎薫
 外業補助員 —— 新崎都

・確認調査（1次調査）

調査期間 —— 平成17年10月13日～11月16日
 調査面積 —— 204㎡（2×2mの調査区51ヶ所）
 担当者 —— 南あわじ市教育委員会 山崎裕司
 外業補助員 —— 宇治田力・筒井健司

・本発掘調査（2次調査）

調査期間 —— 平成18年1月4日～2月15日
 調査面積 —— 700㎡（A地区350㎡・B-1地区35㎡・C-1地区250㎡・C-2地区65㎡）
 担当者 —— 山崎裕司・谷口梢
 外業補助員 —— 宇治田力

・整理作業（平成17年度）

作業内容 —— 2次調査出土遺物の洗浄・接合・整理・写真整理
 担当者 —— 山崎裕司
 内業作業員 —— 宇治田力・垣脇美奈子・新崎都・筒井健司・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗

・確認調査（3次調査）

調査期間 —— 平成18年6月19日～28日
 調査面積 —— 84㎡（2×2mの調査区21ヶ所）
 担当者 —— 山崎裕司・谷口梢

・本発掘調査（4次調査）

調査期間 —— 平成18年7月24日～10月13日

調査面積 —— 680㎡（B-2地区170㎡・B-3地区65㎡・B-4地区425㎡・B-5地区20㎡）

担当者 —— 山崎裕司・谷口梢

外業補助員 —— 宇治田力

・整理事業（平成18年度）

作業内容 —— 4次調査出土遺物の洗浄・接合・整理・写真整理

担当者 —— 山崎裕司

内業作業員 —— 赤井友美・市場一也・宇治田力・垣脇美奈子・白川裕二・新崎都・筒井健司
富岡美早子・豊田亜希子・濱崎真紀・濱本善美・樹本早苗・三宅靖子

・報告書作成・編集作業（平成30・令和元年度）

作業内容 —— 出土遺物の実測・トレース・写真撮影・遺構図面のトレース・執筆・編集・発行

事務局 —— 教育長 浅井伸行 教育次長 山見嘉啓（平成30年度）仲山和史（令和元年度）
社会教育課長（埋蔵文化財調査事務所長兼務） 福田龍八

担当者 —— 山崎裕司

内業作業員 —— 白川裕二

第1章の註

1. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 2005年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2009
2. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ 2006年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2010

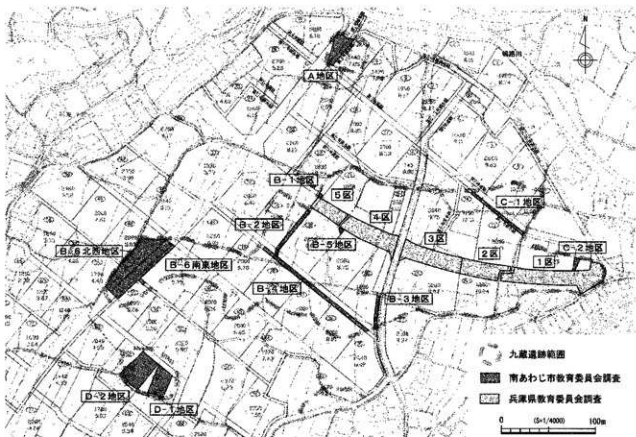


図1 調査区設定図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 淡路島南部の地形と気候

淡路島は、周囲 203km、総面積 596km²を有する瀬戸内海最大の島である。北は明石海峡、東は紀淡海峡、西は鳴門海峡により囲まれ、古来より瀬戸内海の海上交通において重要な位置を占めてきたと思われる。

地質・地形的には、花崗岩から構成される北部の津名山地と和泉砂岩や頁岩から構成される南部の論鶴羽山地に大別される。論鶴羽山地の北西側には島内最大の三原平野が広がっており、大日・三原・成相川などの各河川が流れ、合流して平野内を南東から北西方向に播磨灘へ流れ込む。

淡路島南部の気候は、瀬戸内海性気候に外洋性気候が加味された温暖な気候で年平均気温 15～16℃、年平均降水量は全国平均よりやや少ない 1,407mmを測る。



図2 南あわじ市の位置

2. 遺跡周辺の地形

九蔵遺跡は南あわじ市阿万東町に所在する。阿万地区は淡路島の南西端に位置し、南は海に面する。東側は上述の論鶴羽山地、西側は南辺寺山塊に挟まれ、小規模な平野部が広がる。

遺跡周辺は論鶴羽山地より流れ出る鴨路川によって形成された標高2～8mの低平な沖積地で、北から南方向に緩やかに傾斜する。

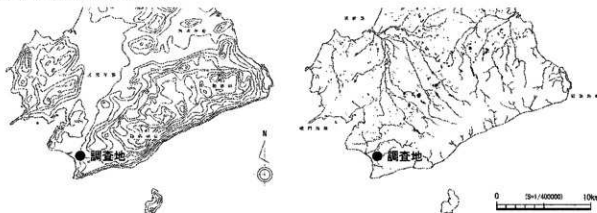


図3 淡路島南部の地形と調査地の位置

第2節 歴史的環境

九蔵遺跡（阿万東町）が所在する阿万地区では、東沖田地区や阿万本庄地区での圃場整備事業、県道洲本灘賀集線（阿万バイパス）や市道阿万190号線などの道路整備事業が行われ、大規模な開発事業が進化した結果、新しい遺跡の発見、淡路島の歴史を踏る上で重要な発見が相次いだ。これらの知見を交えながら、阿万地区を中心とした歴史的環境を見ていくことにしたい。

1. 縄文時代

現在、両遺跡は本庄川ダムに水沈しているが、小倉遺跡（阿万上町）では有舌尖頭器が採集されており（註1）、奥河内遺跡（阿万上町）では縄文時代草創期の山形押型土器が採集されている（註2）。九蔵遺跡C地区では縄文時代晩期の廃棄土坑等が検出された（註3）。

2. 弥生時代

九蔵遺跡B・C地区では弥生時代前期後葉～中期前葉の溝・土坑・竪穴住居等が検出されており

（註4）、阿万地区にも拠点的な集落が成立していたことが明らかとなった。

井手田遺跡A地区では前期後葉～中期初頭の土坑や竪穴住居が検出されており（註5）、中期後半には島内最大規模の方形周溝墓群が形成される（註6）。

北田遺跡では中期後半と推定される竪穴住居が検出されている（註7）。

弥生時代後～木期にかけては、遺跡は小規模な

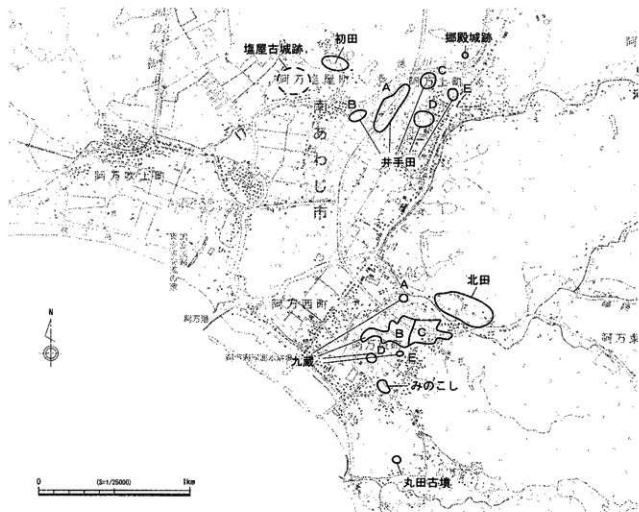


図4 調査地周辺の遺跡

から数が増加し、塩屋川流域には初田遺跡と井手田遺跡(註5)、鴨路川流域には九蔵遺跡(註4)と北田遺跡、木庄川流域には佐古谷遺跡と河内遺跡(註2)が立地する。九蔵遺跡B地区、井手田遺跡A地区、河内遺跡では竪穴住居が検出されている。

3. 古墳時代

阿万地区では、前・中期古墳は確認されており、後期の丸岡古墳2基が確認されているのみで、石室は2.95×0.9mの1号墳と2.9×1.25mの2号墳で構成され、ともに小竪穴式石室を埋葬施設とする(註8)。

井手田遺跡A地区では中期を中心とする竪穴住居が検出された他、B地区で当時の河道周辺の低湿地帯と推定される場所に土器だまりが形成されており、前期の管玉2点、ガラス玉1点、F1玉7点が出土した。土器には小型丸底土器や高環等の供献土器が多く含まれており、川や水と関わる祭

紀を行ったと推定される(註5・6)。

九蔵遺跡B地区では後期の竪穴住居が検出されている(註4)。

4. 飛鳥・奈良時代

古代三原郡は倭文・備多・養宜・椋列・神福・阿万・賀集の7郷から構成されていた。淡路島では古代地名が比較的多く残存しており(註9)、阿万をはじめとするこれらの古代地名のほとんどが現在の地区の名称として使われている。

井手田遺跡A地区では奈良時代の掘立柱建物が多数検出されており(註5)、旧塩屋川の中州に大きな集落が形成されていた。集落の南限では飛鳥～奈良時代の総柱建物が検出されており、その南側には条里型地割りが広がることから、収穫物を納めるための倉庫であったと推定される(註6)。

九蔵遺跡D地区では飛鳥時代と推定される梁行2間(約4.8m)×桁行4間(約7.8m)の大型側柱建物が検出され、柱穴からは古墳時代後期の銅芯銀張の耳環が出土しており(註10)、官衙的な建物の可能性が高い。奈良時代になるとB地区に官衙建物群が構成され、最大の側柱建物は梁行2間(約5.0m)×桁行5間(約10.8m)で、同地区内でこれまで国内で51枚しか確認されていない和同開珎銀銭が出土している。製塩炉や鹹水溜め等の製塩遺構も見つかっており、製塩と深く結びついた官衙遺跡であったと推定されている(註4)。九蔵遺跡は平安時代初頭になると製塩とともに、官衙遺跡としても終焉を迎える。

5. 平安時代

井手田遺跡A地区では母屋部分が梁行2間(約4.7m)×桁行5間(約11.6m)で54.5㎡、廂部分を入れると約7.1×14.0mで約99.4㎡の規模となる大型建物が検出されている(註6)。またD地区では古代の瓦が多数出土しており、周辺に寺院等の施設が存在した可能性がある(註11)。

初田遺跡では平安時代の土器が出土しており、これに近い塩屋古城跡は江戸時代の地誌『淡路草』に「源平の時安麻六郎宗益居す」と記されるが真偽の程は定かでない。



6. 中世

貞応2(1223)年の「淡路国太田文」に、「得長壽院并八幡宮御領」と記される「阿万庄」は、「木庄百町、沼嶋三町」合わせて「田百廿町」で、淡路国では「賀集庄」の「田百廿町」に次ぐ大きな面積を誇る。

鎌倉時代に最も大きな集落が形成されていたのは、井手田遺跡A地区のある旧塩屋川の中洲周辺で、これまで20棟近くの掘立柱建物が検出されている(註5)。塩屋川下流域の低平な三角洲地帯の開発や農業生産を背景に、大きな集落が成立したと推定される。

一方で九蔵遺跡C地区でも鎌倉時代の建物が多く見つかっているが、その中でも兵庫県教育委員会主体の調査で検出された1区SB03は梁行4間(9.0m)×桁行5間(11.5m)の総柱建物で、103.5㎡の面積は淡路島内でこれまで検出された中世建物の中で最大規模を誇る。2区SB04は梁行3間(7.3m)×桁行6間(11.0m)の総柱建物で、面積80.3㎡は1区SB03に次ぐ規模である。これらの建物は荘園の中心となる建物と推定され、小字「九蔵」に位置することから、公所すなわち「ぐぞ」が地名として残ったのではないかと指摘がなされている(註4)。九蔵遺跡で集落が立地するのは14世紀代までで、15世紀以降、集落は微高地である北田遺跡に移

動し、九蔵遺跡周辺は一面農耕地となり、現在のような景観へと変化していくと推定される。

井手田遺跡でも15世紀前後、集落に大きな変化がおこる。A地区では検出された室町時代の掘立柱建物が2棟と激減するが、E地区では14世紀後半～15世紀前半の掘立柱建物が8棟検出されており(註12)、八幡神社周辺の集落が次第に発展し、阿万地区の中心となっていくと推定される。

城跡としては郷殿城跡があり、東西から山が迫る狭隘な地形で、阿万側の山上に細長い平坦地が見られ、「郷殿はん」と呼ばれる小祠が残る。郷丹後守重朝が城主と伝えられ、江戸時代の地誌『淡路常磐草』等に淡路守護細川氏の氏族が郷氏を名乗って在城したと記されている。正福寺は建長元(1249)年銘の薬師如来像を木尊とする現存する寺であるが、周辺では平安～室町時代の瓦が採集されている。『淡路草』に「村老曰當寺旧後山に有り」、「昔僧坊十二遍有り」と記される。

第2章の註

1. 『三原郡史』三原郡町村会 1979
2. 『河内遺跡』南淡町教育委員会 1997
3. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 2005年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2009
4. 『九蔵遺跡』兵庫県教育委員会 2015
5. 『井手田遺跡』兵庫県教育委員会 2018
6. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅵ 2010年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2014
7. 『北田遺跡』兵庫県教育委員会 2003
8. 『淡路島の古墳時代』洲本市淡路文化史料館 1993
9. 武田信一『淡路島の地名研究』兵庫県地名研究会 1996
10. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅴ 2008年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2012
11. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ 2012年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2017
12. 『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅷ 2011年度 埋蔵文化財調査』南あわじ市教育委員会 2015

第3章 調査成果

第1節 A地区

A地区は九歳遺跡の最北端に立地し、北側には鴨路川が西方向に流れる。標高は約7.1m、調査区の面積は350㎡である。鎌倉時代の掘立柱建物が2棟復元できた。



図5 A地区の位置

1. 層序 (図6)

鎌倉時代の遺構を8・9層上で検出した。4～7層が鎌倉時代を中心とする遺物包含層で、4・5層と6・7層にかけて遺物を取り上げた。

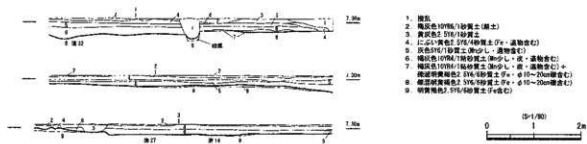


図6 A地区 南東壁層序図

2. 遺構 (図7、写真図版2)

鎌倉時代の遺構を検出し、柱穴から建物1・2を復元した。溝32は建物1の雨落ち溝ではないかと思われる。建物1柱穴埋土には炭が含まれないが、建物2や溝32には含まれることから、建物1焼失後、幣地を行い(層序図6層)、建物2が建てられたのではないかと推定される。

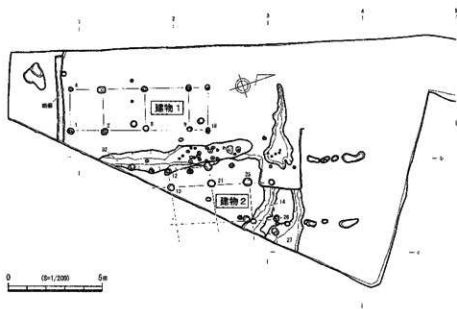


図7 A地区 平面図

建物1 (図8)

梁行1間×桁行4間で、桁行柱間はばらつきが大きく、特に桁行北端の1間は柱間が短いことから、付属的な施設の可能性も考えられる。建物の面積は16.40㎡、方位はN17°Eを示す。柱穴の埋土は層序図6層と同じような土質、土色であるが、炭を含まない。

建物2 (図8)

梁行1間以上×桁行3間以上で、東側と南側に広がる可能性がある。西側の1間と北側の1間は柱間が短いことから、付属的な施設の可能性も考えられる。建物の方位はN16°Eを示す。柱穴の埋土は層序図6層と同じような土質、土色である。

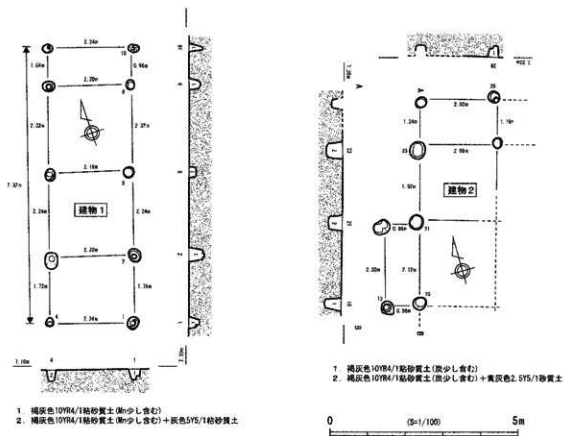


図8 A地区 建物1・2 平面・断面・層序図

3. 遺物

遺構埋土から鎌倉時代の遺物が出土し、包含層からは鎌倉時代を中心とする遺物が出土した。

(1) 遺構出土遺物 (図9・10、写真図版7)

建物1

柱穴9から1の土師器小皿が出土した。口縁部は内湾し、端部を丸くおさめる。復元口径8.3cm・復元底径6.1cm・器高1.2cmを測る。



図9 A地区 遺構出土遺物1

建物2

柱穴 12 から 2、柱穴 21 から 3・4、柱穴 23 から 5 が出土した。2 は土師器皿で、体部は内湾、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。復元口径 15.1cm・復元底径 9.9cm・器高 3.1cm を測る。3 は土師器小皿の底部である。復元底径 6.0cm を測る。4 は瓦器壺で、断面三角形の高台が付く。底部内面には平行にミガキ、体部内面には横方向に雑なミガキが施される。体部外面にはユビオサエ痕が残りに、ミガキは見られない。底径 5.0cm を測る。5 は煮炊具の口縁部と推定され、外面はヨコナデ、内面に横方向のハケメを施す。

溝14

6・7 が出土した。6 は土師器小皿で、口縁部は少し内湾し、全体に摩耗が激しい。復元口径 8.8cm・復元底径 6.9cm・器高 1.4cm を測る。7 は土師器壺で、体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。体部外面には横方向に雑なミガキ、内面上半は横方向、下半は不定方向に密なミガキを施す。復元口径 15.8cm を測る。

溝32

8 が出土した。8 は瓦器壺の底部で、断面台形の高台が付く。内面にミガキが施される。復元底径 5.0cm を測る。

(2) 包含層出土遺物 (図11・12、写真図版7)

9～23 は 4・5 層から出土し、鎌倉時代を中心とするが 17 等、室町時代に下る遺物が混入する。24～30 は 6・7 層から出土し、鎌倉時代を中心とするが 24・25 等、平安時代に遡る遺物が混入する。

9 は青磁碗の底部で、内面に劃花文と思われる文様が施される。復元底径 6.1cm を測る。10・11 は白磁碗で、体部下半は内湾し、台形の高台が付く。どちらも復元底径 5.6cm を測る。12 は白磁碗で、口縁端部が玉縁状をなす。復元口径 17.9cm を測る。13 は白磁皿の口縁部と推定され、内湾し、端部を尖り気味におさめる。14 は白磁皿の口縁部と推定され、外反し、端部を尖り気味におさめる。15 は瓦器壺で、断面三角形の高台が付く。全体に摩耗が激しい。底径 4.4cm を測る。16 は煮炊具の口縁部と推定され、端部に面をもち上方に少し拡張する。17 は羽釜型の煮炊具で、体部外面にタタキが施される。18 は土師器壺の高台部と推定される。復元底径 7.6cm を測る。19 は土師器皿で、体部は直線的で、口縁端

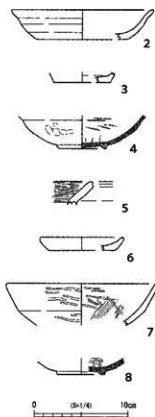


図10 A地区 遺構出土遺物2

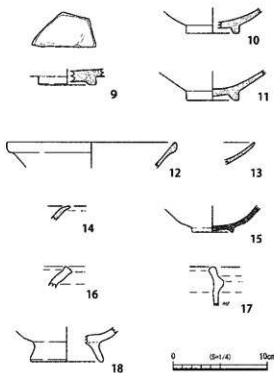


図11 A地区 包含層出土遺物1

部を丸くおさめる。体部はロクロナデを施す。底部外面は摩耗が激しく一部回転糸切痕が残る。復元口径 14.8cm・復元底径 11.0cm・器高 3.4cm を測る。**20** は土師器小皿で、体部下半は直線的である。底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径 5.4cm を測る。**21・22** は平高台の土師器皿等と推定される。**21** は口縁部で、少し内湾し、端部に面をもつ。外面はロクロナデを段状に施す。復元口径 9.7cm を測る。**22** は底部で、外面に回転糸切痕が残る。底径 4.4cm を測る。**23** は須恵質の瓦で、布目痕が残る。

24 は黒色土器塊で、「ハ」字状にひろく高台が付く。内面にミガキを施す。復元底径 8.7cm を測る。**25** は黒色土器塊で、「ハ」字状にひろく高台が付く。内面にミガキを施す。復元底径 7.1cm を測る。**26** は土師器塊で、底部外面の中心部を削って高台を残し、ロクロナデを施す。底径 6.3cm を測る。**27** は土師器皿で、体部下半は内湾する。底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径 9.2cm を測る。**28** は土師器皿で、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径 9.4cm を測る。**29** は土師器小皿で、口縁部は直線的で、端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。復元口径 9.0cm・復元底径 6.4cm・器高 1.3cm を測る。**30** は土師器小皿で、口縁部は内湾し、端部を尖り気味におさめる。全体に摩耗が激しい。復元口径 8.1cm・復元底径 6.4cm・器高 1.6cm を測る。

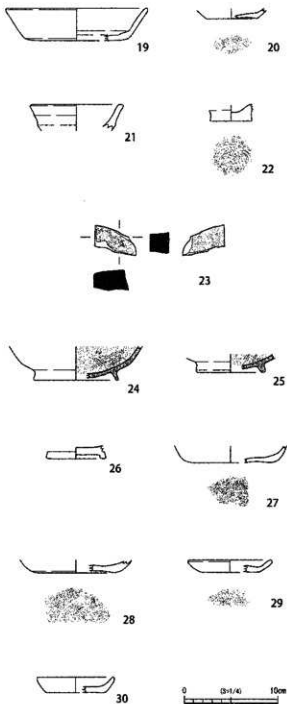


図 12 A地区 包含層出土遺物 2

第2節 B-1地区

B-1地区は九蔵遺跡の中央付近に立地し、兵庫県教育委員会が本調査を行った5区に隣接する。標高は約8.0m、調査区の面積は35m²である。中世の掘立柱建物1棟と奈良時代の掘立柱建物1棟が復元できた。



図13 B-1地区の位置

1. 層序 (図14)

奈良時代と中世の遺構を12層上面で検出した。7層が中世の遺構埋土、9・10層が奈良時代を中心とする遺物包含層、11層が弥生時代終末期を中心とする遺物包含層と推定されることから、本来の中世遺構面は9面上面、奈良時代の遺構面は11層上面と考えられる。2～8層と9～11層にわけて遺物を取り上げた。

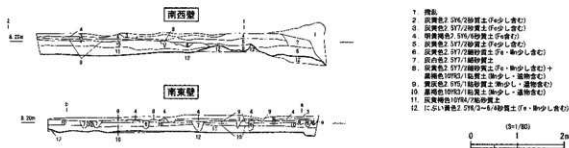


図14 B-1地区 南西・南東壁層序図

2. 遺構 (図15、写真図版2)

奈良時代と中世の遺構を同一面で検出し、奈良時代の建物3と中世の建物4を復元した。

建物3 (図16、写真図版2)

当地区南側の兵庫県教育委員会5区SB01の柱穴と対応し(註1)、奈良時代の梁行2間×桁行3間の側柱建物であることがわかっている。建物の方位はN26°Eを示す。柱穴の埋土には層序図10層と同質、同色の土が混じる。



図15 B-1地区 平面図



図16 B-1地区 建物3 平面・層序図

建物4 (図17)

地区外北東～南東に広がる可能性があり、規模や構造は不明であるが、南東～北西方向が梁行、南西～北東方向が桁行となり、北西側に廂が付属する構造と推定される。建物の方位はN 38° Eを示す。柱穴の埋土は層序図7層と同じような土質、土色である。

3. 遺物

出土遺物から土坑22は中世の遺構、土坑11は奈良時代の遺構と推定される。包含層からは中世、奈良時代、弥生時代終末期頃の遺物が出土している。

(1) 遺構出土遺物 (図18、写真図版8)

建物4

柱穴7から31が出土した。鉄製の釘で、断面方形で、長さ10.3cmを測る。

土坑11

32の土師器坏が出土した。体部は内湾し、口縁部は外反し、端部内側に沈線を巡らせる。体部にロクロナデを施す。復元口径19.0cmを測る。

土坑22

33の土師器小皿が出土した。底部外面は摩耗が激しいが、回転糸切痕が観察される。復元底径5.0cmを測る。

(2) 包含層出土遺物 (図19・20、写真図版8)

2～8層から34～36が出土しており、34は中世、35・36は奈良時代の遺物である。9～12層から37～46が出土しており、37～40は奈良時代、41～46は弥生時代終末期頃の遺物である。

34は土師器皿で、底部外面は回転糸切後、ナデを施す。復元底径6.8cmを測る。

35は須恵器坏B蓋で、ロクロナデを施す。復元口径16.1cmを測る。36は須恵器坏Aで、底部外面は回転ヘラ切後、ナデを施す。復元底径7.4cmを測る。37は須恵器坏B身で、体部は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。体部はロクロナデを施し、底部は回転ヘラ切後、高台を付ける。

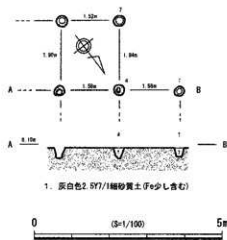


図17 B-1地区 建物4 平面・断面・層序図

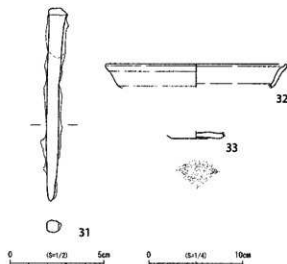


図18 B-1地区 遺構出土遺物

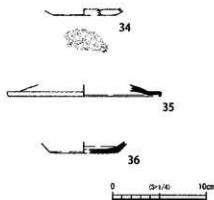


図19 B-1地区 包含層出土遺物1

復元口径 14.4cm・底径 10.0cm・器高 3.9cm を測る。**38** は須恵器坏B身で、短い高台が付く。復元底径 9.6cm を測る。**39** は製塩土器で、器壁が 1cm 以上と厚く、丸底Ⅳ式(註2)の口縁部と推定される。**40** は土師器坏もしくは皿で、底部は回転ヘラ切後、断面三角形の高台を付ける。復元底径 15.0cm を測る。

41 は高坏の脚部で、復元底径 14.4cm を測る。**42** は高坏の脚部で、底径 13.6cm を測る。**43** は高坏の脚部で、中空部に内盤充填を行っている。基部径 2.2cm を測る。**44** は甕の底部と思われる。底部外面中央がやや凹む。復元底径 3.2cm を測る。**45** は東阿波型の甕と思われる。体部は倒卵形で、外面は摩耗により調整不明であるが、内面はケズリによって器壁を薄く仕上げる。口縁部をヨコナデし、「く」字状を呈する。口縁端部に面をもち、上方につまみあげる。底部は平底であるが、丸底化が進んでいる。口径 13.8cm・頸部径 12.7cm・体部最大径 20.3cm・底径 3.0cm・器高 22.1cm を測る。**46** は壺である。体部は倒卵形で、内面の頸部との境目付近に粘土つなぎ痕が観察されるが、全体に摩耗しており調整不明である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部を玉縁状に仕上げる。底部は平底であるが、丸底化が進んでいる。口径 17.5cm・頸部径 12.3cm・体部最大径 28.0cm・底径 4.5cm・器高 36.4cm を測る。

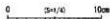
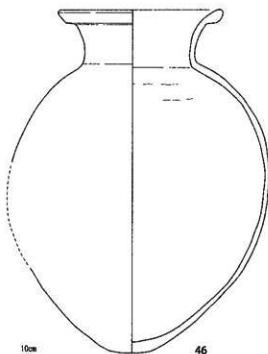
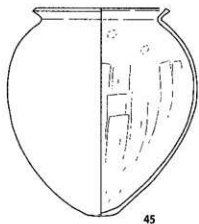
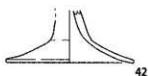
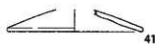


図 20 B-1 地区 包含層出土遺物 2

第3節 B-2地区

B-2地区は九歳遺跡の中央付近に立地し、兵庫県教育委員会が本調査を行った5区に隣接する。標高は7.0～7.6m、調査区の面積は170㎡である。鎌倉時代の井戸・土坑、律令期の遺構等が検出された。



図21 B-2地区の位置

1. 層序 (図22)

4・6・7層が鎌倉時代、10～13層が奈良時代を中心とする律令期の遺物包含層と推定される。16層上面で鎌倉時代と律令期の遺構を検出したが、およそ4ラインより北東側は鎌倉時代の遺構、4ラインより南西側は律令期の遺構が中心と思われる。

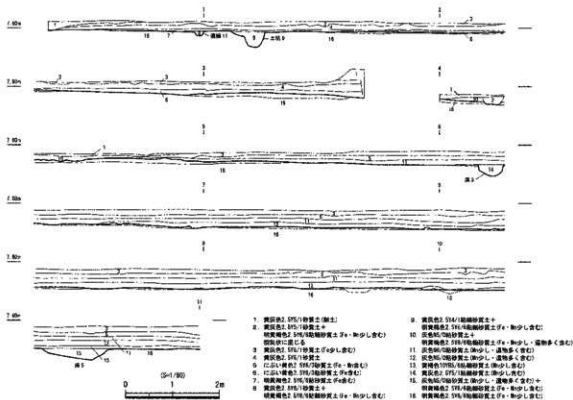


図22 B-2地区 南東壁層序図

2. 遺構 (図23、写真図版3)

鎌倉時代の井戸10a・10bと土坑9、律令期の溝3・5等を検出した。

井戸10a・10b (図24、写真図版4)

鎌倉時代の井戸10aと井戸10bの2基が並んで検出され、切り合いから少なくとも井戸10aを先に埋め戻しているが、出土遺物に明確な時期差は確認できない。

井戸10aは約1.2m掘り下げた最下部に、底板が無い曲物の桶を、底縁を下にして設置し、14層を裏込め土として埋め戻している。曲桶周囲には固定するための杭が残っていた。曲桶より上部の構造は不明であるが、12・13層を埋め戻していることから、さらに曲桶を重ねて12・13層を裏込め土とし、

井戸廃棄時に上部の曲桶に関しては抜き取りが行われた可能性も考えられる。井戸廃棄後、7～11層で埋戻しを行っている。

井戸10bは約1.0m掘り下げた最下部に、底板が無い曲桶を、底縁を下にして設置し、6層を裏込め土として埋戻している。井戸10aのような周囲の杭は確認できなかった。廃棄後に1～5層で埋戻しを行ったと推定されるが、大型の礫が比較的多く含まれており、曲桶内側にも礫が落ち込んでいたことから、施設の一部に礫を使用していた可能性も考えられる。

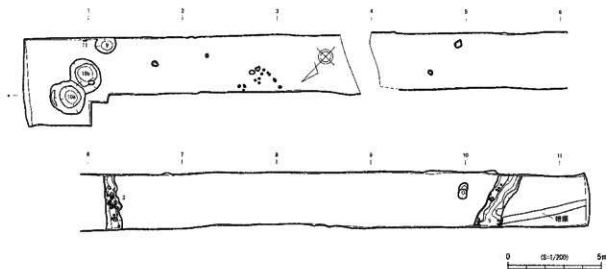
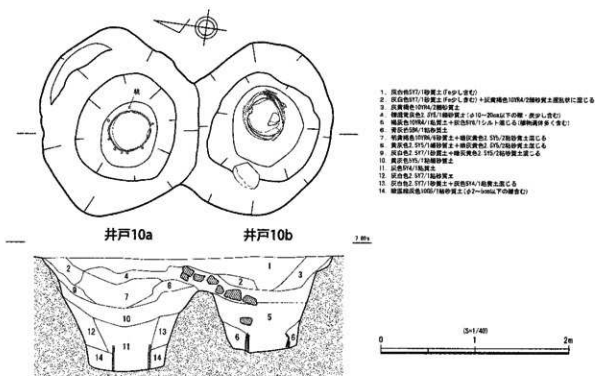


図23 B-2地区 平面図



1. 灰白色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
2. 灰白色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量) + 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
3. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
4. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量) (φ10~20mm以下の礫、炭屑少量)
5. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量) (φ10~20mm以下の礫、炭屑少量)
6. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
7. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量) + 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
8. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量) + 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
9. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量) + 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
10. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
11. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
12. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
13. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量)
14. 灰褐色砂質土(砂質土) (Fe₂O₃少量) (φ10~20mm以下の礫)

図24 B-2地区 井戸10a・10b 平面・層序図

土坑9 (図25、写真図版3)

井戸 10 b の南側で検出された鎌倉時代の土坑である。深さは約 0.6 m で、地下水位が高いにも関わらず、単一層で粘質の堆積土が見られないこと、出土した土器群の残りが比較的良好なこと、掘削後すぐに土器等と共に埋め戻された可能性が高い。井戸 10 b と 1 m 程しか離れておらず井戸の祭祀等と関わりをもつ土坑の可能性が高い。

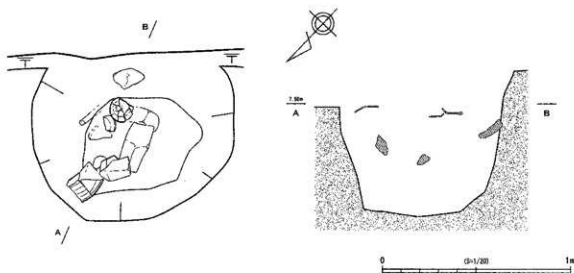


図 25 B-2地区 土坑9 平面・断面図

3. 遺物

出土遺物から溝 3・5 は鎌倉期、土坑 9 と井戸 10 a・10 b は鎌倉時代の後半、13 世紀後半～14 世紀初頭頃と考えられる。包含層からは奈良時代を中心とした遺物が多く出土している。

(1) 遺構出土遺物 (図26～31、写真図版 9～11)

溝3

47 の須恵器坏 B 身が出土した。短い高台が付き、体部下半は内湾する。復元底径 8.0cm を測る。

溝5

48 は製塩土器で、口縁部は少し内湾する。器壁が薄く、丸底IV式より古い時期と推定される。

土坑9

49～58 が出土した。49 は羽釜形の瓦質土器である。短い罫部を付け、端部に面をもつ。三足の接合痕が残っており、79 と同一個体の可能性もある。罫部から口縁部にかけてヨコナデを行う。体部内面にはハケメを施す。復元口径 17.9cm・復元罫部径 22.8cm を測る。50 は瓦器塊で、体部は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は切り離し後ナデ、体部外面下半にはユビオサ

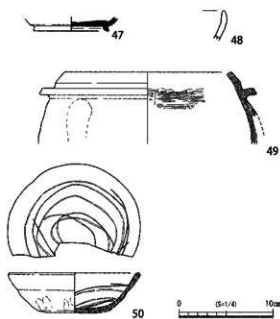


図 26 B-2地区 遺構出土遺物 1

エ痕、体部内面には雑な渦状のヘラミガキを施す。口縁部はヨコナデを行っている。口径 14.0cm・底径 7.6cm・器高 4.3cm を測る。51 は東播系の鉢である。体部は内湾し、口縁端部を上下に拡張し、口縁部内面が少し凹む。復元口径 28.6cm を測る。52～54 は須恵器皿で体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。口縁部に重ね焼き痕が残る。52 は体部にロクロナデを施し、底部外面に回転糸切痕が残る。底部内面中央には小さな渦状に何らかの調整を行っている。渦は右回りに中心へ向かう。復元口径 12.0cm・底径 6.5cm・器高 2.9cm を測る。53 は体部にロクロナデを施し、底部外面には回転糸切痕が少し残る。底部中央は穴埋めを行ったと思われる粘土つぎの跡が見られる。口径 12.9cm・底径 7.2cm・器高 3.1cm を測る。54 は体部にロクロナデを施し、復元口径 11.0cm を測る。55 は同安楽系の D 期 (註 3) に属する青磁碗もしくは皿の体部下半の破片と思われる。56～58 は有孔土錘である。56 は長さ 4.2cm・最大径 1.8cm・孔径 0.4cm、57 は長さ 3.5cm・最大径 1.8cm・孔径 0.5cm、58 は長さ 3.5cm・最大径 1.7cm・孔径 0.5cm を測る。

井戸 10 a・10 b

井戸 10 a の出土遺物は 59～77、井戸 10 b の出土遺物は 78～85、86・87 はいずれの井戸出土か不明である。

59 は井戸 10 a 底から出上した曲桶で、材質の樹種はヒノキ科アスナロ属と同定された (註 4)。側板は、最大内径 42.0cm・最小内径 41.3cm・高さ 27.6cm・板の厚み約 0.5cm を測り、幅約 0.8cm の樫によって、外 10 段内 10 段の外面返し縫い (註 5) で綴じられている。内側全面に 0.5～0.8cm 間隔で上下方向のケビキを入れ、これ以外にこれに交わる斜め方向のケビキが認められる。底板は残っておらず、口縁部と比較して底縁部は傷みが激しいが、底縁端部から 1.0～1.5cm 上に底板を固定していたと思われる木釘の穴が 3ヶ所確認できた。補強の箍が側板外側の上下 2ヶ所に巻かれている。上の箍は幅 9.0～10.5cm・厚み約 0.4cm の板を、幅 0.7cm の樫によって、外 8 段内 7 段の外面返し縫いによる本綴じと外 2 段内 1 段の小綴じの 2カ所で綴じられている。口縁端部から 1.0～1.5cm 下に箍から側板に貫通する 2ヶ所の穴が確認でき、箍が外れないように木釘で固定した跡と推定される。下の箍は幅 7.6～10.3cm・厚み約 0.3cm の板を、幅 0.9cm の樫によって、内 7 段外 7 段の内面返し留めによる本綴じと外 2 段内 1 段の小綴じの 2ヶ所で綴じられている。

60・61 は 59 の周囲に残っていた杭である。60 はブナ科シイ属と樹種同定され (註 4)、先端が折れているが径約 2.1cm の枝を削り出して杭としている。61 はツバキ科ヒサカキ属と樹種同定され (註 4)、径約 2.9cm の枝を削り出して杭としている。

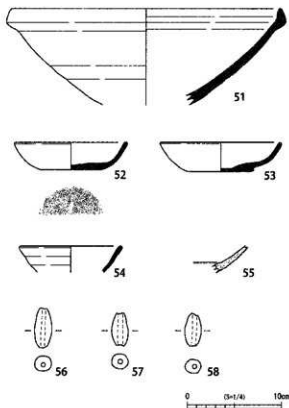
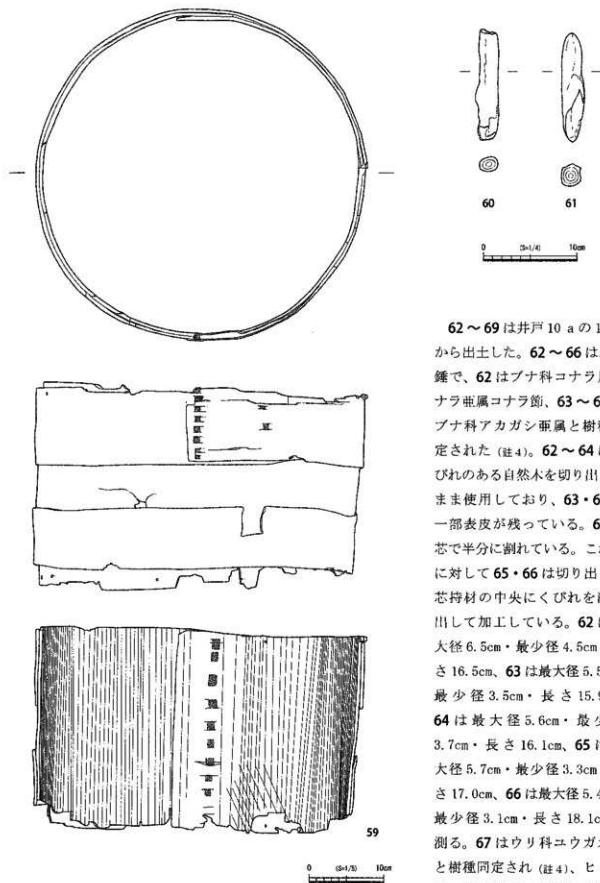
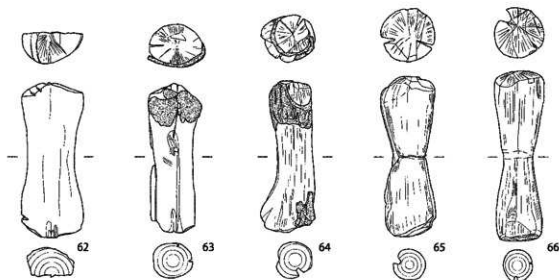


図 27 B-2 地区 遺構出土遺物 2



62～69は井戸10 aの11層から出土した。62～66は木製錘で、62はブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節、63～66はブナ科アカガシ亜属と樹種同定された(註4)。62～64はくびれのある自然木を切り出したまま使用しており、63・64は一部表皮が残っている。62は芯で半分に分れている。これらに対して65・66は切り出した芯持材の中央にくびれを削り出して加工している。62は最大径6.5cm・最少径4.5cm・長さ16.5cm、63は最大径5.5cm・最少径3.5cm・長さ15.9cm、64は最大径5.6cm・最少径3.7cm・長さ16.1cm、65は最大径5.7cm・最少径3.3cm・長さ17.0cm、66は最大径5.4cm・最少径3.1cm・長さ18.1cmを測る。67はウリ科エウガオ属と樹種同定され(註4)、ヒョウタン等を利用して椀状の容器に

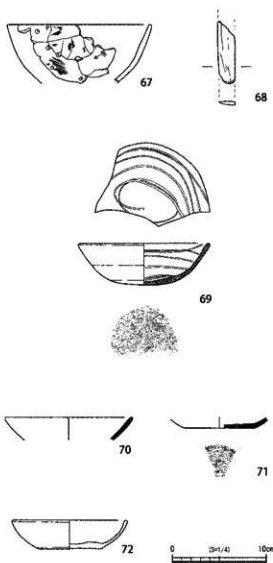
図28 B-2地区 遺構出土遺物3



28 表皮

したと推定される。復元口径 15.5cm を測る。口縁端部は面をもち、口縁端部から約 0.6cm 下がった穴およびさらに下に 4.0cm 下がった穴は整った円径を呈しており、この 2 穴は人為的な穿孔の可能性が高い。68 は木筒状の木製品で、ツバキ科サカキ属サカキと樹種同定され、径目取で上下が破損しており、幅 1.9cm・厚み 0.4cm を測る。赤外線撮影を行ったが炭素痕等は確認されなかった(註 4)。69 は瓦器壺で、体部は内湾し口縁端部を丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残り、体部外面にはロクロナデ、体部内面は雑な渦状のヘラミガキを施す。復元口径 14.0cm、底径 7.2cm、器高 4.4cm を測る。

70～76 は井戸 10 a 東部の上～中層、77 は西部の上～中層から出土した。詳細な層位は不明で、井戸 10 b を埋戻した 1～5 層に含まれていた可能性もある。70 は須恵器皿で、体部上半はロクロナデを施して少し内湾する。口縁部に重ね焼き痕が残り、口縁端部を丸くおさめる。復元口径 13.6cm を測る。71 は須恵器皿の底部で、底部外面に回転糸切痕が残り、復元底径 7.4cm を測る。72 は土師器皿で、体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。体部はロクロナデ、底部外面は糸切後ナデを施し、内面中央には左周りに中心へ向か



29 B-2地区 遺構出土遺物 4

う渦状の調整痕が残る。復元口径 12.1cm・底径 7.2cm・器高 3.0cm を測る。**73** は土師器皿の体部で、ロクロナデを施して内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径 12.0cm を測る。**74** は土師器皿の底部で、体部下半は内湾し、底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径 7.1cm を測る。**75** は土師質の裏の口縁部で、外側にひらき、端部に面をもち、上方に拡張する。比較的砂粒を多く含み、紀伊型の可能性がある。**76** は有孔土錘で、正確な長さは不明であるが、最大径 1.2cm・孔径 0.4cm を測る。**77** は羽釜型の土製煮炊具の胴部である。

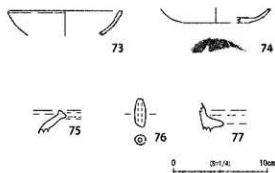


図 30 B-2 地区 遺構出土遺物 5

78 は井戸 10 b 底から出土した曲桶で、材質の樹種はヒノキ科アスナロ属と同定された(註4)。側板は、最大内径 41.3cm・最小内径 39.7cm・高さ 20.0cm・板の厚み約 0.3cm を測る。縦じた樫は残っておらず、内面に 5 段の縦じ跡が観察できるが、下段が欠損しているため正確な段数は不明である。内側全面に 0.4～0.8cm 間隔で上下方向にケビキを入れ、これ以外にこれに交わる斜め方向のケビキが認められる。底板は残っておらず、底縁から 1.0～1.3cm 上に底板を固定していたと思われる釘穴 7ヶ所が確認できた。補強の樫が側板外側の上下 2ヶ所に巻かれている。上の樫は幅 6.7～9.5cm・厚み約 0.3cm の板を、幅 0.7cm の樫によって 2列で本綴じを行っているが下半が欠損しており正確な段数は不明である。また樫は残っていないが、外 1 段で小綴じを行っている。下の樫は幅 8.5～9.0cm・厚み約 0.3cm の板を、幅 1.0cm の樫によって 2列に外 5 段で内返し留めで本綴じ、外 3 段で小綴じを行っている。下端より 1.0～1.3cm 上に木釘の穴が 14ヶ所確認でき、上記の本体の木釘の穴 7ヶ所と間隔が完全に一致することから(図 32 の A～D が一致)、この樫は本来側板底縁部にあり、樫の外側から底板を固定するための木釘が打たれていたことが確認された。

79～82 は井戸 10 b 東部の上～中層、**83～85** は井戸 10 b 西部の上～中層から出土した。**79** は羽釜形の瓦質土器の三足部分と推定され、**49** と同一個体の可能性もある。先端を外側に屈曲させる。体部内面には横方向に細かいハケメを施す。**80** は須恵器皿の底部で、外面に回転糸切痕が残る。復元底径 7.2cm を測る。**81** は土師器皿の底部で、外面に回転糸切痕がわずかに残る。底径 6.3cm を測る。**82** は土師器皿で、体部はロクロナデを施し内湾する。口縁端部は丸くおさめる。底部外面に回転糸切痕が残る。器高 3.4cm を測る。**83** はマツ科モミ属と樹種同定され、板目取で木筒状としている。赤外線撮影を行ったが墨書痕等は確認されなかった(註4)。幅 2.3cm・厚み 0.4cm を測る。**84** は瓦器塊で、体部上半は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。外面にロクロナデを施す。復元口径 14.6cm を測る。**85** は甕形の土製煮炊具で、胎土に砂粒を多く含む。口縁は「く」字に外反し、ヨコナデを施す。口縁端部を丸くおさめる。復元口径 28.5cm・復元頸部径 26.9cm を測る。

86・87 は井戸の排土からの採集で、いずれの井戸に属するか不明である。**86** は無文の青磁碗と推定され、口縁部は直線的で端部は少し尖り気味である。**87** は上下が破損しているが長辺 6.0cm・短辺 4.1cm の断面方形の砥石片で、長辺の片面に斜め方向の砥ぎ痕が確認できる。

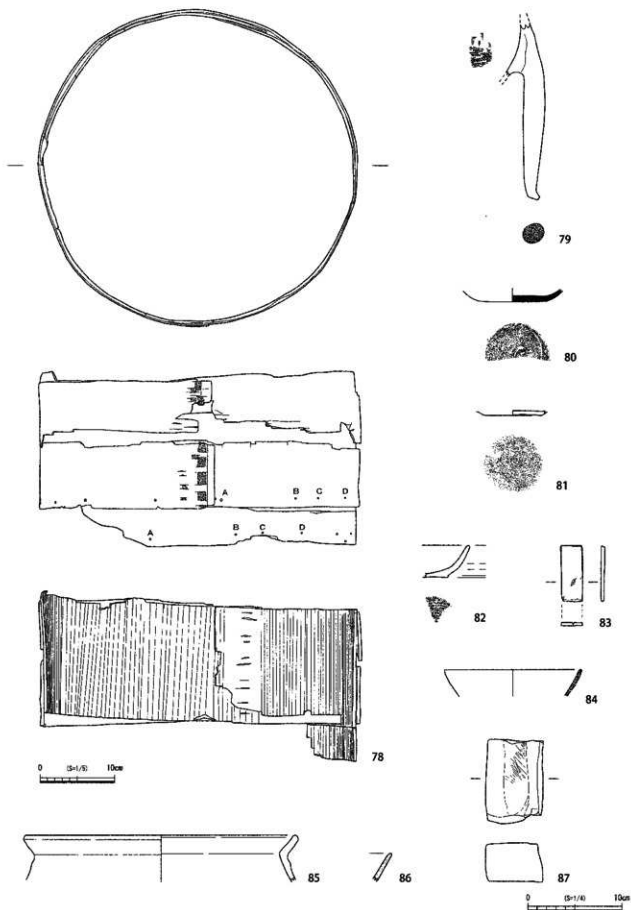


图 31 B-2地区 遺構出土遺物 6

(2) 包含層出土遺物 (図32~34、写真図版12~14)

88 ~ 158 が出土した。88 は弥生時代前期頃、89 は平安時代、90 ~ 152 はおおよそ奈良時代の範疇に収まると思われる。153・154 は鎌倉時代、155 ~ 158 の有孔土鏝は時期不明である。

88 は弥生土器の底部で、底部外面はほぼ平坦で、底径 7.2cm を測る。当地区で図化できた弥生土器はこの 1 点のみで、流れ込みと考えられる。

89 は黒色土器碗の底部高台部分である。内面にわずかにミガキが認められる。復元底径 8.0cm を測る。

90 は土師器環か皿の底部と思われる。低い高台が付き、復元底径 12.2cm を測る。91 は土師器環と思われる。体部は外反し、口縁端部は尖り気味で、口縁部内面に少し凹みが見られる。復元口径 13.6cm を測る。

92 ~ 100 は須恵器の蓋である。口径 17 ~ 19cm の大型の 92 ~ 94 と 11 ~ 14cm の小型の 95 ~ 97 にわかれる。小型は後述する環 B 身の口径にほぼ対応する。92 が復元口径 17.3cm、93 が復元口径 17.5cm、94 が復元口径 18.2cm、95 が復元口径 13.4cm、96 が復元口径 11.8cm、97 が復元口径 12.8cm を測る。98 ~ 100 はつまみ部分で、つまみの径は 98 が 2.2cm、99 が 2.1cm、100 が 2.2cm を測る。

101 ~ 110 は須恵器環 B 身の小型のもので、102 は三角形の高台が付くが、それ以外は低い台形の高台が付く。基本的には体部はわずかに内湾し、口縁端部は丸くおさめる。101・102 は口縁部がわずかに外反する。101 が復元口径 11.4cm・復元底径 7.6cm・器高 4.1cm、102 が復元口径 11.4cm・底径 8.0cm・器高 3.4cm を測る。103 は復元口径 13.2cm・復元底径 9.8cm・器高 4.1cm、104 は復元口径 10.5cm・復元底径 7.8cm・器高 3.3cm、105 は復元口径 12.6cm・復元底径 9.0cm・器高 3.8cm、106 は復元底径 8.6cm、107 は復元底径 8.4cm、108 は復元底径 8.8cm、109 は復元底径 9.2cm、110 は復元底径 6.8cm を測る。

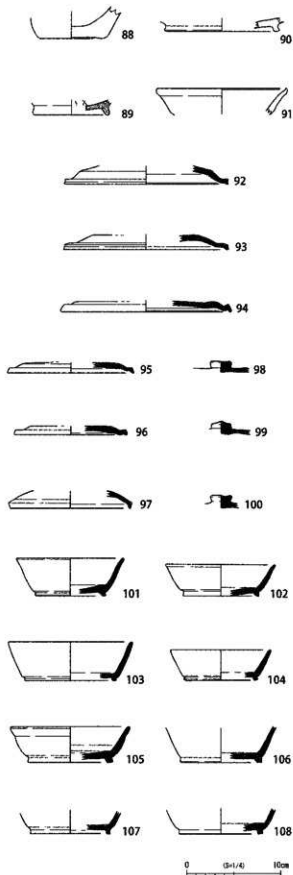


図 32 B-2 地区 包含層出土遺物 1

111・112は大型の須恵器坏B身の底部と思われる。小型のものより高台が高く、器壁が厚い。体部下半は直線的である。111は復元底径11.0cm、112は底径7.6cmを測る。

113～116は須恵器坏A身の底部で、ヘラ切後ナデを施す。113～115の体部下半は内湾する。113は復元底径8.2cm、114は復元底径10.4cm、115は復元底径7.2cm、116は復元底径7.6cmを測る。

117・118は須恵器皿で、口縁部が外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。117はヘラ切後ナデを施し、復元口径16.0cm・復元底径13.6cm・器高2.2cmを測る。118は復元口径18.4cm・復元底径15.8cm・器高1.6cmを測る。

119～124は須恵器の底部で、119は体部下半が内湾し、埴等と推定されるが、それ以外の器種は不明である。119・121～123は低い高台であるが120は高く、124は突出した平底で外面に回転ヘラ切痕が残る。119は復元底径7.6cm、120は復元底径11.2cm、121は復元底径10.6cm、122は復元底径8.4cm、123は復元底径4.6cm、124は復元底径6.6cmを測る。

125～128は須恵器甕で、125は口縁部が外反し、口縁端部を下方に拡張する。復元口径31.6cmを測る。126は口縁部が「く」字状で口縁端部に凹線1条が巡る。復元口径22.8cm・復元頸部径17.8cmを測る。127は外反する長い口縁部をもつ。復元頸部径13.8cmを測る。128は底部周辺で、体部下半の外面にタタキ、内面と底部外面にナデを施す。復元底径15.0cmを測る。

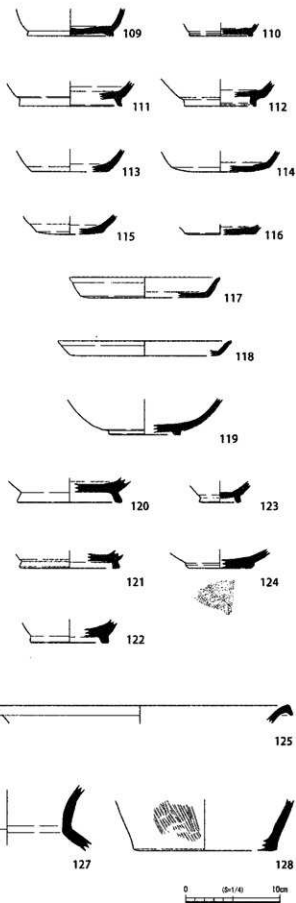


図33 B-2地区 包含層出土遺物2

129～132は須恵器壺である。129は直立する短い口縁部をもち、復元口径12.2cm・復元頸部径12.0cm、130は体部が屈曲し、外面に2条の沈線を施す。復元体部最大径29.6cmを測る。131・132は口縁部が外反し、131は口縁端部を上方に拡張する。131は復元口径11.6cm、132は復元頸部径6.0cmを測る。

133は土師器の甕等の口縁部で、外側にひらき、口縁端部に面をもち、上方に少し拡張する。復元口径24.0cmを測る。134は口縁部が「く」字状で口縁端部を上方に拡張する。形態的には土師器甕であるが、砂粒を多く含み、二次焼成を受けていることから製塩土器の可能性も考えられる。復元口径14.4cm・復元頸部径12.2cmを測る。135も同様に砂粒を多く含み、製塩土器の可能性も考えられる。口縁部が外側に屈曲する。

136～152は製塩土器である。136～148は器壁が厚い部分で1cm以上あり、砲弾型を呈する丸底IV式の製塩土器と思われる。136は底部、それ以外は口縁部である。149～152は器壁がやや薄く、136～148より遅る時期と推定される。149・150は体部が内湾し、151・152は口縁部が外反する。

153・154は東播系須恵器の鉢である。153は口縁端部に面をもち、下方に拡張する。復元口径23.8cmを測る。154は口縁端部外側が丸みをもち、内側に凹みが見られる。

155～158は有孔土鏝で、155は長さ4.8cm・最大径2.2cm・孔径0.7cm、156～158は正確な長さは不明であるが、156は最大径1.2cm・孔径0.4cm、157は最大径1.1cm・孔径0.3cm、158は最大径1.1cm・孔径0.4cmを測る。

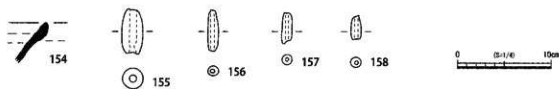
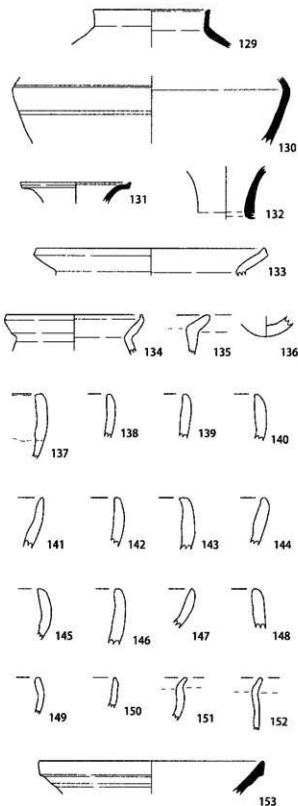


図34 B-2地区 包含層出土遺物3

第4節 B-3地区

B-3地区は九蔵遺跡の中央付近に立地する。標高は8.9m、調査区の面積は65㎡である。弥生時代と平安時代の土坑等が検出された。



図35 B-3地区の位置

1. 層序 (図36)

弥生時代と平安時代の遺構を5層上面で検出した。遺物包含層はほとんど残っておらず、農地開発に伴い削平を受けたと思われる。

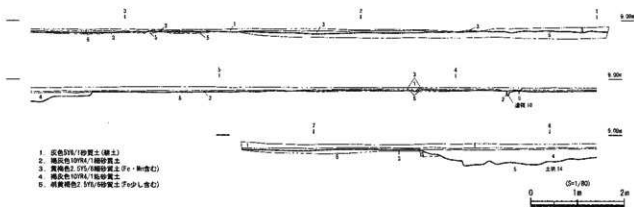


図36 B-3地区 西壁層序図

1. 遺構 (図37、写真図版5)

全体に遺構は少ない。土坑5は弥生時代前期頃の遺物が出土しており、埋土は炭を多く含み、地山面に火を受けた痕跡がみられる。土坑13・14からは平安時代の土器と共に鉄屑が出土している。

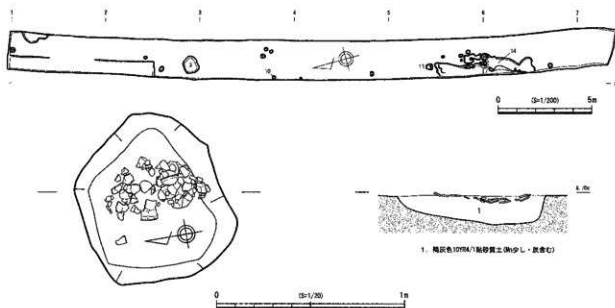


図37 B-3地区 平面図・土坑5 平面・層序図

3. 遺物

出土遺物から土坑5は弥生時代前期頃、土坑13・14は平安時代頃と推定される。包含層はほとんど残っていないが、弥生時代前期頃、平安時代頃の遺物が出土している。

(1) 遺構出土遺物 (図38、写真図版15)

土坑5

159～161が出土した。159は石織の未製品の破片である。160は弥生土器の甕で口縁部は如意形を呈し、復元口径は32.8cmを測る。161は弥生土器の壺の体部上半で、ヘラ描き沈線4条を施す。復元体部最大径28.0cmを測る。

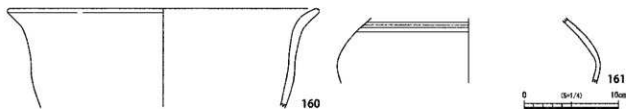


図38 B-3地区 遺構出土遺物

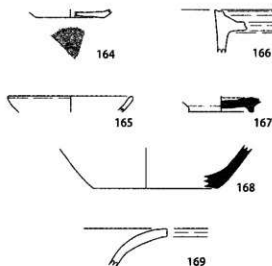
土坑13

162は内黒の黒色土器壺の高台部分である。復元底径9.6cmを測る。



土坑14

163～168が出土した。163は内黒の黒色土器壺の高台部分である。164は土師器皿の底部と推定され、底部外面はヘラ切り痕が残る。復元底径7.4cmを測る。165は土師器壺等の口縁部で、口縁端部を丸くおさめる。復元口径13.1cmを測る。166は羽釜の口縁部で、ヨコナデを施し、口縁端部と鏝部の端部に面をもつ。167は須恵器坏Bの底部と推定され、短い高台部をもつ。底部径6.9cmを測る。168は須恵器壺等の底部と推定され、復元底径13.2cmを測る。



(2) 包含層出土遺物 (図39、写真図版15)

層位は不明であるが、169～171が出土している。169は弥生時代の壺の口縁部で、外反し、端部に面をもつ。170・171は平安時代の遺物である。170は土師器壺の体部下半で、短い高台をもち、高台の端部に面をもつ。復元底径7.3cmを測る。171は土師質の平瓦で、片面に縄目、片面に布目が残る。

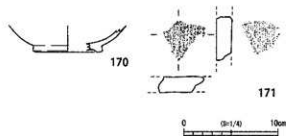


図39 B-3地区 遺構・包含層出土遺物

第5節 B-4地区

B-4地区は九藏遺跡の中央付近に立地し、標高は約7.4～8.5m、調査区の面積は425㎡である。奈良時代の掘立柱建物が4棟、中世の掘立柱建物が4棟復元でき、飛鳥時代の土坑等が検出された。



図40 B-4地区の位置

1. 層序 (図42)

調査区南東側で、律令期と中世の遺構を37～41層上面で検出した。16～18層は奈良時代の遺物を中心とした遺物包含層であるが、11ブロックの16層からは縄文土器が出土しており、周辺からの流れ込みと思われる。およそ15ブロックを境に層序に変化が見られ、これより北西側は生産域であったと推定され、律令期の遺構面が34層上面にあることが確認できた。

2. 遺構 (図41、写真図版5・6)

律令期と中世の遺構を同一面で検出し、柱穴から建物5～12を復元した。理由は後述するが、建物5～8は奈良時代、建物9～12は中世と推定される。これ以外の遺構について、遺構121・137は中世で、これ以外はおおよそ奈良時代を中心とした律令期であるが、土坑16・21・66は飛鳥時代に遡る可

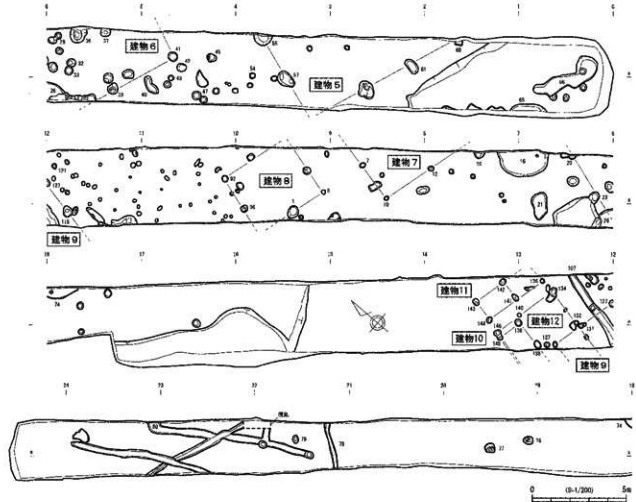
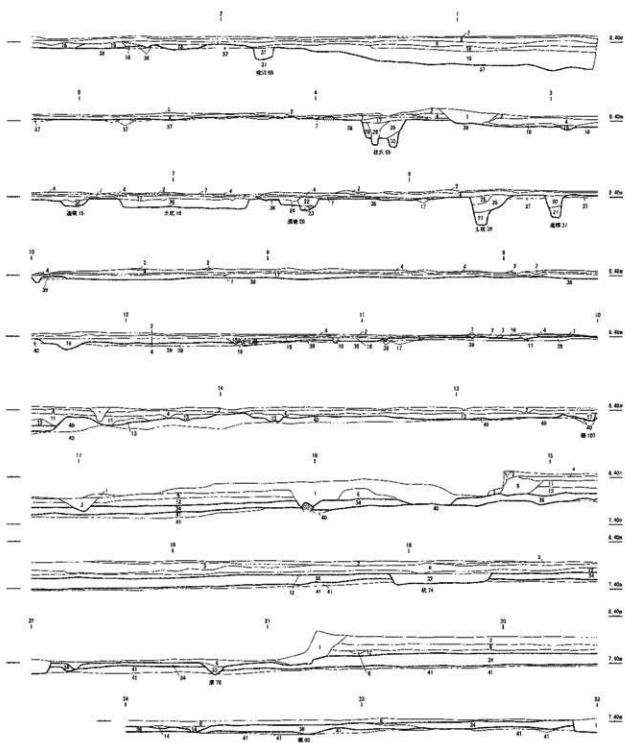


図41 B-4地区 平面図



1. 礎石
2. 礎土
3. 灰色S16/1粘砂質土 (F少し含む、黄褐色)
4. 黄褐色S17R2/粘砂質土+黏土
5. 暗褐色S105R6/粘砂質土+炭灰S16/1粘質土 (F少し含む)
6. 灰質土S17/2粘質土 (F含む)
7. 褐色S107R4/粘砂質土 (F多く含む)
8. 灰褐色S107R5/粘砂質土 (F多、黄褐色含む)
9. 灰白色S17/1粘質土
10. 灰褐色S17/1粘質土+黄泥S2/S15/1~粘灰黄色S2粘砂質土 (F多く、遺物含む)
11. 褐色S17R1粘質土 (F少し、遺物含む)
12. 灰褐色S17R1粘質土 (F少し、遺物含む)
13. 褐色S17R1粘質土 (F多く含む)
14. 褐色S17R1粘質土 (F多く含む)
15. 黄褐色S17R1粘砂質土 (F多く含む)
16. 黄泥S2/S15/1~粘灰黄色S2粘砂質土 (F多く、遺物含む)
17. 灰褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く、遺物含む)
18. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く、遺物多く含む)
19. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F15cm以下の層含む)
20. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く、d=5cm以下の層含む)
21. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (d=10cm層含む)
22. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く)
23. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (d=10cm以下の層含む)
24. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く、遺物多く含む) → 2. S16/1に多い黄色粘砂質土 (F多く含む)
25. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く含む)
26. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F15cm以下の層含む)
27. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土
28. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く含む)
29. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土+緑泥黄褐色S2/S15/2粘質土 (d=10~20cm層含む)
30. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土
31. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多、灰含む)
32. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土 (F少し、灰含む)
33. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F少し含む)
34. 黄褐色S2/S14/2粘砂質土 (F少し、遺物含む)
35. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く含む)
36. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F少し含む)
37. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F15cm以下の層含む)
38. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く含む)
39. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F多く含む)
40. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (d=10~20cm層含む)
41. 暗褐色S2/S14/2粘砂質土 (F少し含む)

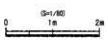


図 42 B-4地区 北東壁層序図

能性があり、遺構 37 と溝 107 は平安時代に下ると思われる。調査区北西側は検出遺構が少なく、溝が主体となることから、生産域であったと推定される。

建物 5 (図43)

3 間以上×2 間以上の側柱建物で、長径 1 m 程度的大型柱穴から構成され、官衙的な建物の可能性が高い。柱穴の平面形は円形ないし楕円形である。建物の方位は N 24° E で、建物南側には流路あるいは旧河道の一部と考えられる落ち込みが存在し、肩部が直線的で建物の方位と一致する。柱穴出土遺物より奈良時代と思われる。

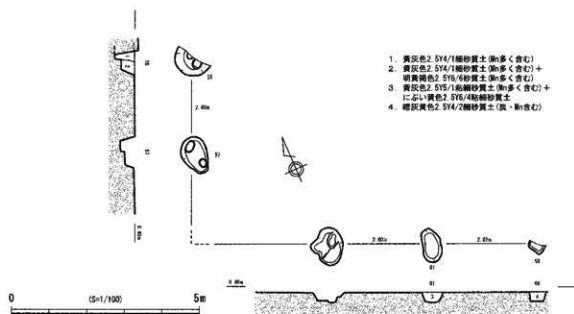


図 43 B-4 地区 建物 5 平面・断面・層序図

建物 6 (図44)

梁行 2 間×桁行 2 間以上の側柱建物である。建物の方位は N 21° E である。柱穴出土遺物より奈良時代と思われる。

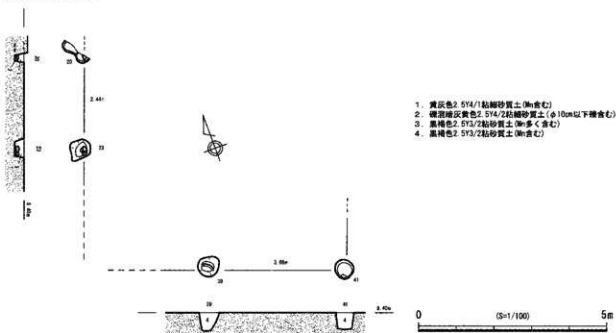


図 44 B-4 地区 建物 6 平面・層序図

建物7 (図45)

1 間以上×1 間以上の側柱建物である。建物の方位はN 15° Eである。柱穴出土遺物は無いが、柱穴埋土が建物5・6に近い黒褐色の色調であることから、奈良時代の可能性が高い。

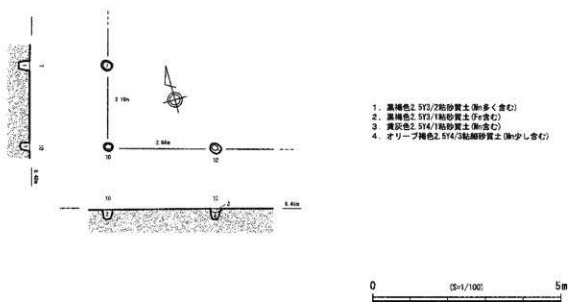


図 45 B-4地区 建物7 平面・層序図

建物8 (図46)

梁行2間×桁行2間の側柱建物である。建物の面積は14.7㎡、方位はN 18° Eである。建物7と同様の理由で、奈良時代の可能性が高い。

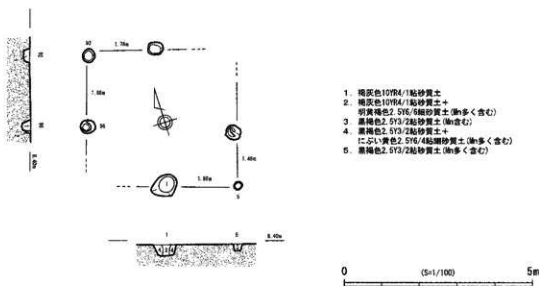


図 46 B-4地区 建物8 平面・層序図

建物9 (図47)

梁行2間×桁行1間以上の側柱建物である。建物の方位はN 16° Eで、建物10と方位が一致し、梁行がほぼ同じ長さであることから、建て替えが行われたと推定される。ただしどちらが先に建てられたかは不明である。柱穴からの出土遺物は無いが、柱穴埋土が建物5～8とは明らかに違う淡い灰色を呈し、建物周辺の遺構121・137から中世の遺物が出土していることから、中世建物の可能性が高い。

建物10 (図47)

梁行2間×桁行1間以上の側柱建物である。建物の方位はN 15° Eである。建物9と同様の理由で、中世建物の可能性が高い。

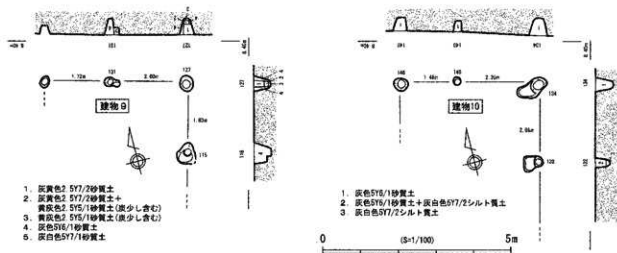


図47 B-4地区 建物9・10 平面・断面・層序図

建物11 (図48)

1間×2間の側柱建物と推定される。建物の方位はN 77° Wで、建物10と柱筋をあわせて建てられた付属的な建物と推定される。建物9と同様の理由で、中世建物の可能性が高い。

建物12 (図48)

1間×1間以上の側柱建物である。建物の方位はN 13° Eで、建物10と建物11が同時期であること、建物11と柱間規模が似ていることから、建物9の付属的な建物の可能性が高い。建物9と同様の理由で、中世建物の可能性が高い。

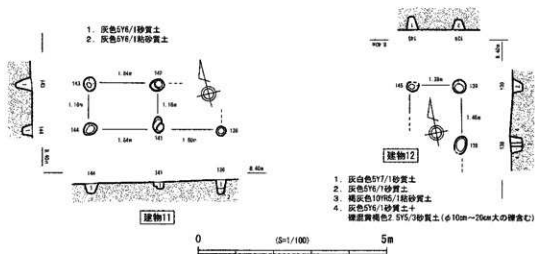


図48 B-4地区 建物11・12 平面・層序図

3. 遺物

遺構 121・137 からは中世の遺物が出上しており、これ以外の遺構からはおよそ奈良時代を中心とした遺物が出上しているが、製塩土器の丸底Ⅲ式のみが出上している土坑 16・21・66 等は飛鳥時代に遡る可能性があり、黒色土器が出上した遺構 37 と溝 107 は平安時代に下と思われる。

包含層からは奈良時代の遺物を中心として、縄文時代後期、飛鳥時代、平安時代、室町時代の遺物が混入する。

(1) 遺構出土遺物 (図49～52、写真図版16～18)

建物 5

柱穴 55 から 172・173 が出土した。172 は土師器坏 A で体部下半がわずかに内湾する。底部外面は切り離した後ナデを施す。復元底径 6.9cm を測る。173 は須恵器坏で体部は直線的、口縁端部を丸くおさめる。柱穴 57 から 174 の須恵器坏 A が出土した。体部は直線的である。復元底径 9.4cm を測る。柱穴 61 から 175・176 が出土した。175 は土師器坏等の口縁部で、外反し、口縁端部を丸くおさめる。176 は須恵器坏等の口縁部で、直線的で、口縁端部を丸くおさめる。柱穴 68 から 177 の須恵器坏 A が出土した。底部外面に回転ヘラ切痕が残る。復元底径 9.1cm を測る。

建物 6

柱穴 20 から須恵器坏等と思われる 178 が出土した。体部は少し内湾、口縁部は少し外反し、口縁端部を丸くおさめる。柱穴 39 から 179 が出土した。土師器坏 A 等の底部で、摩耗が激しく調整不明である。復元底径 9.8cm を測る。

土坑 16

180・181 の製塩土器が出土した。器壁が 5～6mm 程度で丸底Ⅲ式と推定される。

土坑 21

182・183 の丸底Ⅲ式と推定される製塩土器が出土した。

土坑 26

184 は製塩土器で、他に器壁が 1cm 以上の典型的な丸底Ⅳ式の破片も出土しているが、これはやや器壁の薄いタイプである。185 は土師器煮炊具の口縁部と推定され、端部に面をつくり、上方に少し拡張する。186 は土師器皿で、体部は直線的で、口縁端部を丸くおさめ、内側に沈線を巡らせる。器高 1.5cm を測る。

遺構 28

187 は土師器坏等で、体部は直線的で、口縁端部は尖り気味である。復元口径 12.3cm を測る。

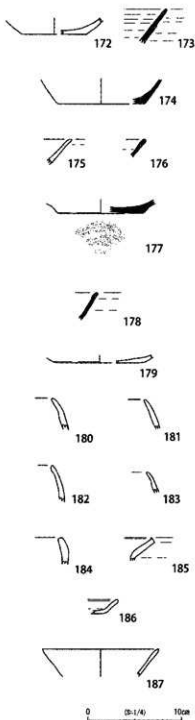


図 49 B-4 地区 遺構出土遺物 1

遺構32

188 は土師器煮炊具の口縁部と推定され、端部に面をつくり、下方に少し拡張する。



遺構33

189 は丸底Ⅲ式と推定される製塩土器である。190 は須恵器坏B等の底部である。台形の高台が付き、底径 9.3cm を測る。



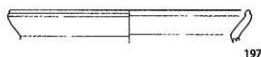
土坑36

191 は土師器坏等で、口縁部は外反し、口縁端部を丸くおさめる。192 は須恵器坏等で、体部は内湾、口縁部は少し外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。193 は須恵器坏等で、体部は少し内湾し、口縁端部を丸くおさめる。194 は須恵器の蓋で、つまみの径は 2.3cm を測る。



遺構37

195・196 は黒色土器塚の底部で、高台が付き、どちらも復元底径 7.6cm を測る。197 は土師器煮炊具の口縁部と推定され、口縁端部を上方に拡張する。復元口径 25.6cm・復元頸部径 23.2cm を測る。



土坑40

198 は土師器坏等で、口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味におさめる。復元口径 13.4cm を測る。



遺構42

199 は丸底Ⅳ式の製塩土器である。200 は土師器煮炊具の口縁部と推定され、口縁端部は丸みもち、内側に肥厚させる。201 は須恵器坏等で、体部は内湾、口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味におさめる。



遺構43

202 は土師器坏等で、体部上半は直線的で、口縁端部内側に沈線を巡らす。203 は須恵器坏等で、体部上半は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。復元口径 14.8cm を測る。



遺構45

204 は丸底Ⅳ式の製塩土器である。205 は須恵器坏Bの底部である。206 は須恵器坏等で、口縁部は少し外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。

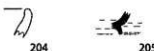
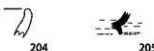


図 50 B-4 地区 遺構出土遺物 2

遺構47

207は丸底Ⅳ式の製塩土器である。208は土師器皿で、体部は少し外反し、口縁端部を丸くおさめる。器高2.3cmを測る。



遺構54

209は土師器杯B等の底部である。



土坑65

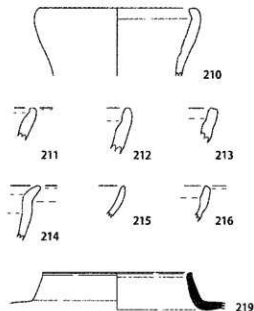
210～214は丸底Ⅳ式の製塩土器である。210は口縁部が内湾し、214は口縁部が外反する。

210は復元口径17.0cmを測る。215・216はこれらよりやや器壁の薄いタイプの製塩土器である。

217は須恵器杯で、体部は少し内湾し、口縁部は尖り気味におさめる。復元口径13.2cmを測る。

218は土師器の蓋で、つまみの径は2.7cmを測る。

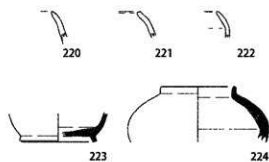
219は須恵器甕で、口縁部は内傾し、口縁端部に面をつくる。体部にタガキが少し残る。復元口径15.9cm・復元頸部径18.1cmを測る。



土坑66

220～222は丸底Ⅲ式と推定される製塩土器である。

223は須恵器杯Bで体部下半が内湾する。復元底径8.1cmを測る。224は須恵器甕で、短い口縁が直立する。復元口径7.8cm・復元頸部径8.0cm・復元体部最大径15.0cmを測る。



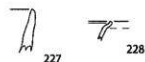
土坑74

225は丸底Ⅳ式の製塩土器で、器壁が薄いタイプと思われる。226は須恵器甕等の口縁部で外反し、口縁端部に面をつくり、上方に拡張する。



遺構76

227は丸底Ⅳ式の製塩土器である。228は土師器杯等の口縁部で外反し、口縁端部を丸くおさめ、内側に沈線を巡らす。



遺構77

229は丸底Ⅳ式の製塩土器で、器壁が薄いタイプと思われる。230は丸底Ⅲ式の製塩土器である。

231は須恵器杯等で、体部上半は直線的、口縁端部を丸くおさめる。

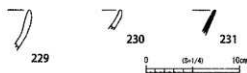
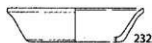


図51 B-4地区 遺構出土遺物3

遺構79

232は土師器坏Aである。体部は直線的で、口縁部は外反、口縁端部に面をつくり、内面に沈線を巡らす。復元口径14.4cm・復元底径10.6cm・器高3.6cmを測る。



溝107

233～244が出土した。またこれ以外に図化は行わなかったが緑土器片や動物の骨片等が出土している。

233は黒色土器塚で、体部は内湾し口縁端部を丸くおさめる。内面にヘラミガキを施す。復元口径13.4cmを測る。234は黒色土器塚で「ハ」字状の高台が付く。復元底径7.6cmを測る。



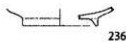
233



234



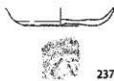
235



236

235は丸底IV式の製塩土器の口縁部である。

236は土師器塚で低い三角形の高台が付く。復元底径8.0cmを測る。237は土師器坏Aで底部外面に回転ヘラ切痕が残る。復元底径8.0cmを測る。



237



238

238は土師器煮炊具の口縁部で「く」字状を呈し、口縁端部に面をつくり、上方に少し拡張する。



239

239～244は須恵器坏である。239は坏Bで低い高台が付く。体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径15.6cm・復元底径9.5cm・器高6.7cmを測る。240の体部は内湾し、口縁部が少し外反する。口縁端部を丸くおさめる。復元口径14.1cmを測る。241の体部は内湾し、口縁端部を丸くおさめる。復元口径13.4cmを測る。242の体部は直線的で、口縁端部を丸くおさめる。復元口径12.2cmを測る。243・244は坏Aの底部で、243は回転ヘラ切痕が残り、復元底径7.8cmを測る。244は復元底径7.8cmを測る。



240



241



242



243



244

遺構121

245は羽釜形の土製煮炊具の跨部分である。播磨型B系列と推定される。(註6) 体部外面にタタキを施す。



245



246

遺構137

246は選弁文の青磁碗である。復元底径5.6cmを測る。



図52 B-4地区 遺構出土遺物4

(2) 包含層出土遺物 (図53～55、写真図版19～21)

247～253は縄文時代後期、254・275は平安時代、294～298は飛鳥時代、299は室町時代、それ以外はおおよそ奈良時代の出土遺物であるが、飛鳥時代や平安時代の遺物が混入している可能性も考えられる。

247～253は11ブロックから出土した。247は深鉢の口縁部と推定され、口縁端部を丸くおさめる。摩耗が激しく調整不明である。248は浅鉢の口縁部と推定され、口縁端部を尖り気味におさめ、内面に沈線を巡らす。外面には条痕が残る。249～251は1cm強の間隔で複数の沈線を施し、全体に薄く、細い縄文が施されているのが観察できる。249・252・253の内面には条痕が残る。

254は黒色土器境で「ハ」字状に開く低い高台が付く。復元底径8.0cmを測る。

255～258は須恵器の蓋である。255は復元口径13.2cm、256は復元口径13.6cm、257が復元口径14.2cm、258が復元口径15.0cmを測る。

259～264は須恵器杯身で、259は低い三角形の高台が付くが、それ以外は低い台形の高台が付く。260は体部が直線的で、それ以外はわずかに内湾する。261・262は口縁部が外反し、口縁端部を尖り気味におさめるが、259・260は丸くおさめる。259が復元口径12.1cm・復元底径7.5cm・器高4.1cm、260が復元口径12.2cm・復元底径8.3cm・器高4.5cmを測る。261は復元口径12.8cm・底径8.5cm・器高4.0cm、262は復元口径12.6cm・復元底径9.0cm・器高3.6cmを測る。263は復元底径9.8cmを測る。264は復元底径7.6cmを測る。

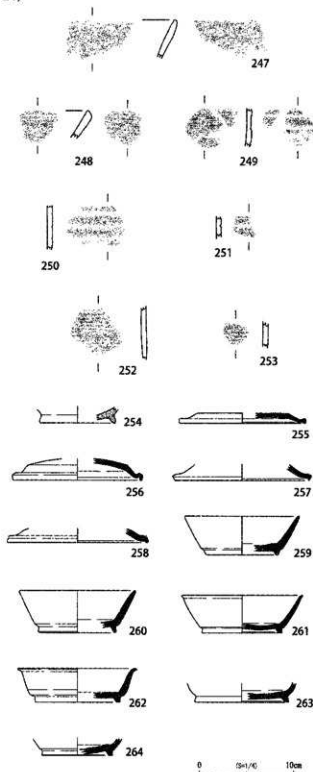


図53 B-4地区 包含層出土遺物 1

265～269は須恵器坏A身である。265は体部は少し内湾、口縁部が外反し、口縁端部を尖り気味におさめる。266～269は底部外面に回転ヘラ切痕が残る。265は復元口径13.1cm・復元底径9.4cm・器高4.3cm、266は復元底径9.0cm、267は復元底径8.2cm、268は復元底径7.4cm、269は復元底径7.0cmを測る。

270は須恵器坏身で、体部は直線的で、口縁端部を尖り気味におさめる。復元口径13.4cmを測る。271は須恵器皿等と推定され、復元底径13.2cmを測る。272は須恵器鉢の口縁部で、口縁端部に面をつくる。273は須恵器甕の口縁部と推定され、口縁端部に面をつくり、下方に拡張する。復元口径23.3cmを測る。274は須恵器壺等の底部と推定され、復元底径12.0cmを測る。

275は平高台の土師器埴等と推定され、体部は内湾する。底部外面に回転糸切痕が残る。復元底径5.0cmを測る。276は土師器甕と推定され、口縁部が外側にひらき、口縁端部に面をもち、上方に拡張する。復元口径28.0cm・復元頸部径22.1cmを測る。277は口縁部が「く」字状で口縁端部を上方に拡張する。砂粒を多く含み、二次焼成を受けていることから製塩土器の可能性が高い。

278～298は製塩土器である。278～290は砲弾形を呈する丸底Ⅳ式の製塩土器と思われる。器壁が厚い部分で1cm以上あり、278は底部、それ以外は口縁部で、口縁部は内湾する。279は復元口径13.6cm、280は復元口径16.6cmを測る。291～293は口縁が外反し、291・292は器壁が1cm強で厚いが、293は7mm程度とやや薄く、復元口径16.9cm・復元頸部径15.1cmを測る。294～298は器壁が非常に薄く、体部が内湾し、丸底Ⅲ式の製塩土器と思われる。294は復元口径12.6cm・復元体部最大径14.4cmを測る。

299は羽釜形の土製煮炊具の鏝部分である。播磨型B系列と推定される。(註6)体部外面にタタキ、体部内面にハケメを施す。

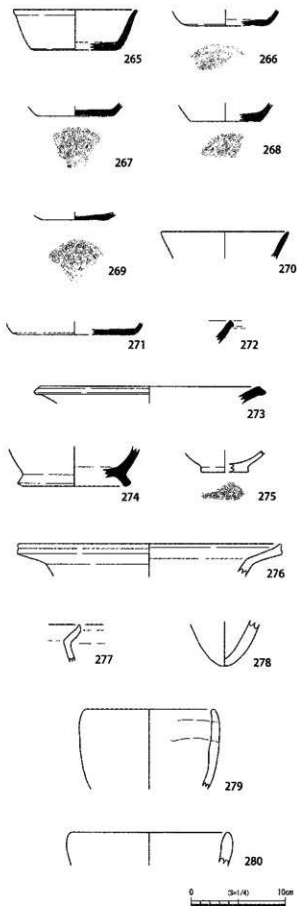


図54 B-4地区 包含層出土遺物2

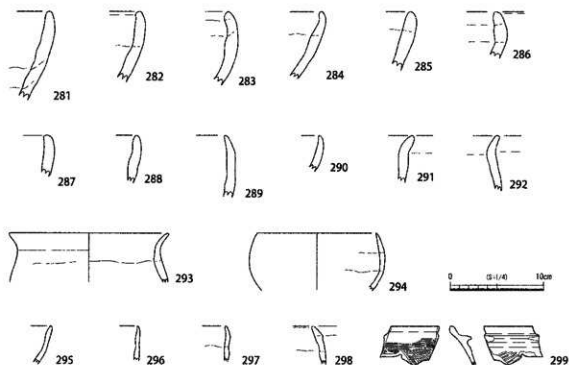


図55 B-4地区 包含層出土遺物3

第6節 B-5地区

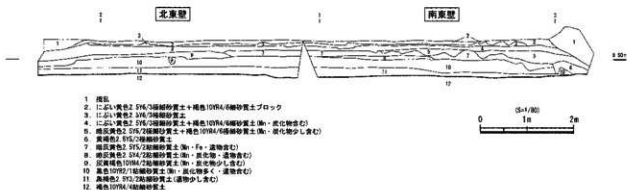
B-5地区は九藏遺跡の中央付近に立地し、兵庫県教育委員が本調査を行った4区に隣接する。標高は約8.4m、調査区の面積は20㎡である。奈良時代の柱列が検出できた。



図56 B-5地区の位置

1. 層序 (図57)

7～11層が律令期の遺物包含層である。12層上面で奈良時代の遺構を検出した。



- 1 雑土
- 2 1:5(土)黄褐色2.5% (2)粘細砂質土+褐色10% (4)粘細砂質土ブロック
- 3 1:5(土)黄褐色2.5% (2)粘細砂質土
- 4 1:5(土)黄褐色2.5% (2)粘細砂質土+褐色10% (4)粘細砂質土 (M) 炭化物含む
- 5 黄褐色2.5% (2)粘細砂質土+褐色10% (4)粘細砂質土 (M) 炭化物少し含む
- 6 黄褐色2.5% (2)粘細砂質土
- 7 黄褐色2.5% (2)粘細砂質土 (M) Fe・炭化物含む
- 8 黄褐色2.5% (2)粘細砂質土 (M) 炭化物、炭屑含む
- 9 黄褐色10% (2)粘細砂質土 (M) 炭化物、炭屑少し含む
- 10 黒色10% (2)粘細砂質土 (M) 炭化物多く、炭屑含む
- 11 黄褐色2.5% (2)粘細砂質土 (遺物少し含む)
- 12 褐色10% (4)粘細砂質土

図57 B-5地区 北東・南東壁層序図

2. 遺構 (図58、写真図版6)

奈良時代の柱列を検出した。

柱列1 (図59)

兵庫県教育委員会4区S B 0 5と同じような方位や柱間を示すことから、この建物が南にさらに一間延びて梁行3間×桁行3間となるか、あるいはこの建物に関係する施設の一部と推定される。柱穴4には柱根が残っていた。柱列の方位はN 56° Wを示す。

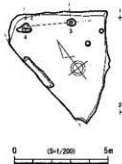
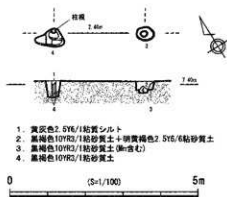


図 58 B-5地区 平面図



1. 黄灰色2.5Y6/1粘質シルト
2. 黄褐色10YR2/1粘砂質土+黄褐色2.5Y6/4粘砂質土
3. 黄褐色10YR2/1粘砂質土(0=遺柱)
4. 黄褐色10YR2/1粘砂質土

図 59 B-5地区 柱列

3. 遺物

奈良時代を中心とする遺物が出土した。

(1) 遺構出土遺物 (図60、写真図版21)

柱列1

柱穴4から300の柱根が出土した。

(2) 包含層出土遺物 (図60、写真図版21)

7～11層から301～303が出土している。

301は須恵器杯蓋で、宝珠形つまみが付く。つまみの径は2.4cmを測る。302・303は丸底IV式の製塩土器の口縁部である。

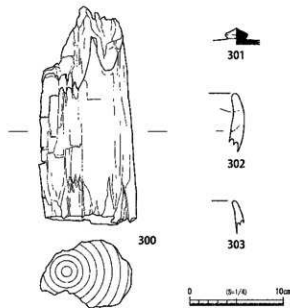


図 60 B-5地区 遺構・包含層出土遺物

第3章の註

1. 『九蔵遺跡』兵庫県教育委員会 2015
2. 『淡路島の古墳時代』洲本市淡路文化資料館 1993
3. 山本信夫『貿易陶磁器(中世前期の貿易陶磁器)』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995
4. 木製品の樹種同定と赤外線撮影は(株)吉田生物研究所に作業委託を行った。
5. 西村歩『典物の細部技法』『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994
6. 岡田章・長谷川眞『兵庫県遺跡出土の土製煮炊具』『兵庫県埋蔵文化財研究紀要 第3号』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003

第4章 総括

第1節 縄文時代

遺物包含層からの出土遺物のみで遺構は確認できなかったが、B-4地区で縄文時代後期頃の土器片が出土している。兵庫県教育委員会の4区(註1)において元住吉山1式を含む後期の土器が数点出土しており、九蔵遺跡では後期後半頃生業をはじめたと考えられる。縄文海進当時、海岸線が入り江状に入り込み、海岸線の真実に立地していた集落であったと推定される。

阿万地域では奥河内遺跡で草創期の山形押型土器が採集されているが、早期～中期の遺跡は未発見で、その間の動向は不明である。九蔵遺跡B-6・C-1地区は次回の報告となるが、晩期の流路や廃棄土坑が検出されており、小規模ながら晩期へと集落が続いていく可能性も考えられる。

淡路島内では、淡路市の佃遺跡(註2)が後期後半頃の遺跡として極めて規模が大きいが、佃遺跡では早期にさかのぼる土器も出土しており、遺跡の成立に関して九蔵遺跡と必ずしも同じ経過を辿っている訳ではないが、佃遺跡が最盛期を迎えた時期に、九蔵遺跡の集落が始まっており、標高10m前後で砂浜の発達した海岸に近く、周囲を山地で囲まれた小規模な扇状地上に遺跡が存在する等、遺跡の環境や立地条件において共通する特徴が見いだせることから、両遺跡は無関係ではないと思われる。

第2節 弥生時代

B-3地区からは弥生時代前期頃の土坑5が検出された。北側の兵庫県教育委員会3・4区が集落の中心付近と推定され、同時期の竪穴住居や溝等の遺構が検出されている。B-3区より南では同時期の遺構は検出されておらず、集落の南縁付近に位置すると推定される。

B-1地区からは終末期頃の残りの良い遺物が出土している。南に隣接する兵庫県教育委員会の4区では、後期後半頃と思われる竪穴住居等が検出されており、周辺に集落が広がっていると推定される。

九蔵遺跡では中期後半～後期前半の遺構等が確認できていないが、九蔵遺跡北東の北田遺跡ではこの時期の竪穴住居が検出されており、この時期にはやや標高の高い山裾に集落が移動している可能性が考えられる。

第3節 律令期

B-1地区から奈良時代の建物3、B-2地区から溝、B-3地区から平安時代の土坑、B-4地区から奈良時代の掘立柱建物5～8、平安時代の溝、飛鳥時代の土坑等、B-5地区から奈良時代の柱列が検出されている。兵庫県教育委員会では4区を中心に官衙建物と考えられる大型建物を含む14棟が検出されており、特に平城京Ⅲ・Ⅳ期が中心時期で、製塩と極めて密接に結び付いた官衙であったと考えられている。今回の調査ではB-4地区の建物5が官衙建物の可能性がある大型建物で、奈良時代の官衙城の最南端に近い建物と推定される。

兵庫県教育委員会の4区の製塩土器はほぼ丸底Ⅳ式といった様相であるが、B-4地区では丸底Ⅲ式が一定の割合を占めており、兵庫県教育委員会の調査区よりやや古い様相を示している。詳細は次回報告するが、九蔵遺跡最南端のD地区では飛鳥時代の官衙建物が検出されており、海に近い九蔵遺跡の南側において最初の製塩をはじめ、奈良時代に中心部が少し北側に移動したと推定される。

第4節 中世

A地区で鎌倉時代の建物1・2、B-1地区の建物4、B-2地区の鎌倉時代の井戸と土坑、B-4地区の建物9～12が検出されている。

奈良時代に官衙が終焉をむかえた後、次に九藏遺跡の動きが活発化するのが、平安時代の終わり頃から鎌倉時代の初めにかけてで、阿万庄の成立と深く関係すると考えられる。鎌倉時代の初め頃にあられる小規模なA地区やB-4地区の建物は一回程度の建て替えて比較的短期間で消長する。第2章第2節でも述べたが、同じ阿万の井手田遺跡でも鎌倉時代の集落が室町時代まで続かない状況が確認されており、荘園の耕地開発の進展に伴って、一般農民の住居は度々移動を強いられたものと推定される。

B-2地区の土坑9と井戸10 a・10 bは上記の建物より後出する鎌倉時代の終わり頃の遺構であるが、曲桶2点や鏝等の木製品、一括性の高い土器群等、非常に重要な資料を得ることができた。

土器の編年的な詳細については次回以降にまとめて報告する事とし、土坑9の一括遺物と特殊な瓦器塚である50・69を中心に少し述べておきたい。

上坑9出土751は明石市魚住窯跡赤板川支群の東播系須恵器で13世紀以降、49は詳細な時期は不明であるが枚方市楠葉野田遺跡(註3)等、摂津や淀川水系に多く分布する三足が付く瓦質土器である。50と井戸10 aの69は高台の無い瓦器塚であるが、13世紀後半になると各地でこのような塚が出現する(註4)。両者は形態と内面の渦状のヘラミガキは共通する要素があるものの、50が体部外面にユビオサエ痕が残り、口縁部にヨコナデを行っていることから瓦器塚として一般的な手づくねによる成形が行われているのに対して、69は底部に回転糸切痕が残り、回転台による成形を行っており、成形技法が全く異なることが興味深い。淡路島の瓦器塚は和泉型の影響が強いが、両者は深さがあり法量的には楠葉型に近い。また淡路島北部では高台の無い瓦器塚の出土例があり、淡路市惣司遺跡で比較的法量的に近い瓦器塚が出土している(註5)。69の成形技法については、淡路島南部では上器器塚皿や須恵器皿に回転台による成形が伝統的に続いていくことから、その影響を感じさせる。和泉型瓦器塚の影響に加えて、楠葉型や淡路島北部の瓦器塚との関わり、淡路島南部の回転台土師器・須恵器との関係も考慮しながら、今後の資料の増加を待ちつつ注視していくことにしたい。これらの出土遺物の時期としては、13世紀後半から14世紀初頭頃と現状では広く捉えておきたい。

第4章の註

1. 『九藏遺跡』兵庫県教育委員会 兵庫県教育委員会 2015
2. 『佃遺跡』兵庫県教育委員会 兵庫県教育委員会 1998
3. 『枚方文化財年報IX』1989 財団法人枚方市文化財研究調査会
4. 橋本久和「瓦器塚の編年と年代観」
5. 『第28回中世土器研究会 中世考古学と地域・流通』日本中世土器研究会 2009
6. 川古知子氏(旧北波町職員)の指示による

写真図版 1

調査地遠景 (南東より)



調査地近景 (北より)



調査地近景 (東より)



写真図版 2

A地区 全景 (北より)



B-1地区 全景 (北西より)



B-1地区～
兵庫県教育委員会5区
建物3 (南東より)



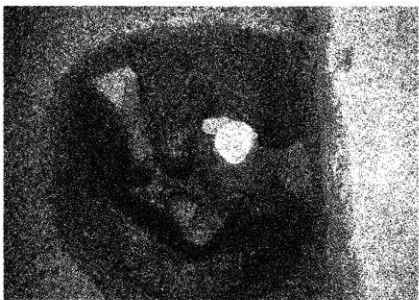
写真図版 3



B-2地区 南西部（北東より）



B-2地区 北東部（北東より）



B-2地区 土坑9（南西より）

写真図版 4

B-2地区
井戸 10a・10b (東より)



B-2地区 井戸 10a (西より)



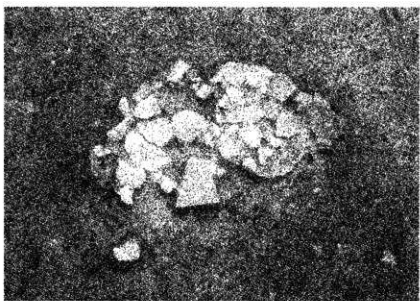
B-2地区 井戸 10b (西より)



写真図版 5



B-3地区 全景(南より)



B-3地区 土坑5
遺物出土状況(西より)

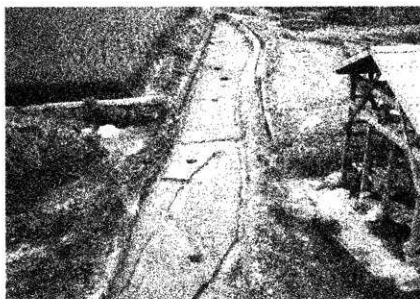


B-4地区 南東部(南東より)

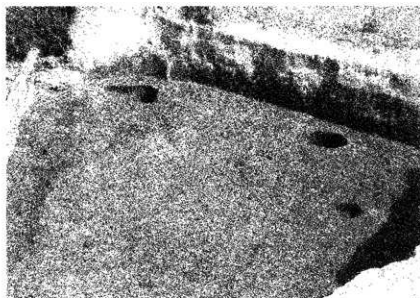
写真図版 6



B-4地区 中央部 (南東より)

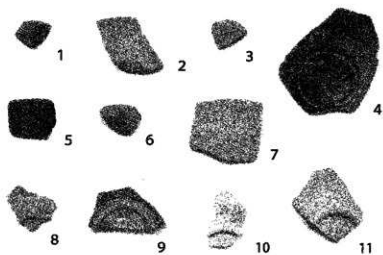


B-4地区 北西部 (北西より)

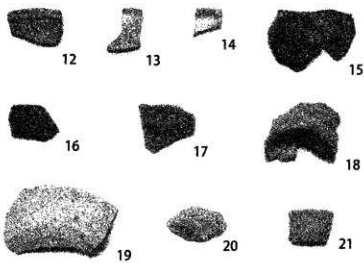


B-5地区 全景 (南より)

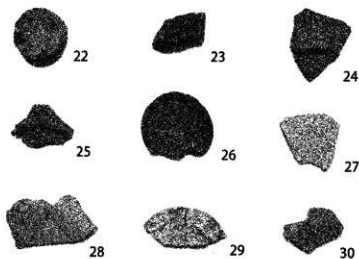
写真図版 7



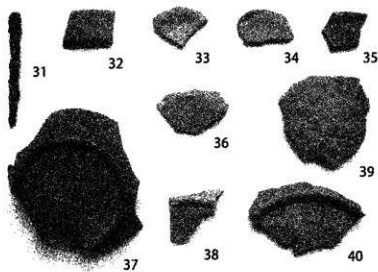
A地区 遺構・包含層出土遺物



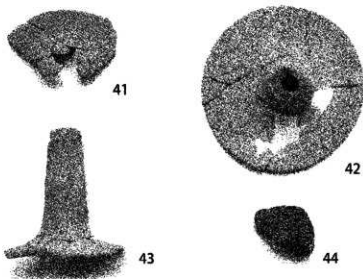
A地区 包含層出土遺物



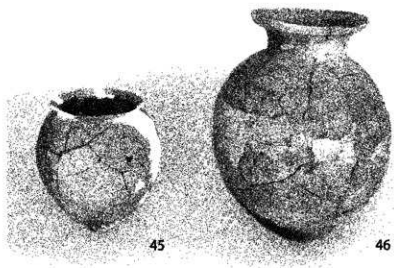
A地区 包含層出土遺物



B-1 地区
遺構・包含層出土遺物

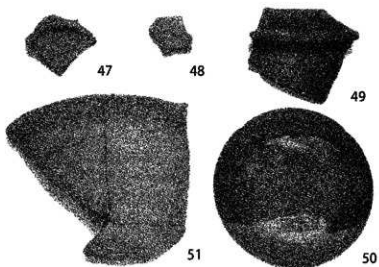


B-1 地区 包含層出土遺物

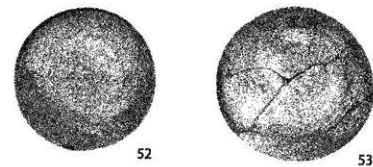


B-1 地区 包含層出土遺物

写真図版 9



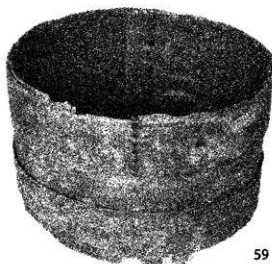
B-2地区 遺構出土遺物

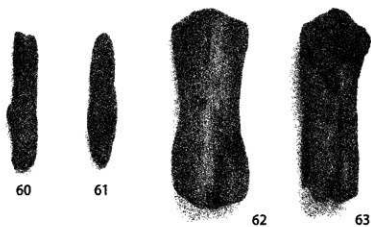


B-2地区 遺構出土遺物

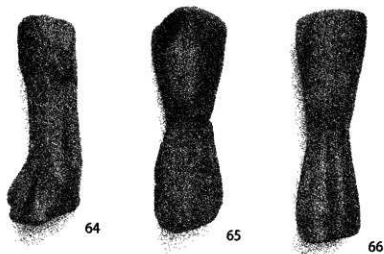


B-2地区 遺構出土遺物

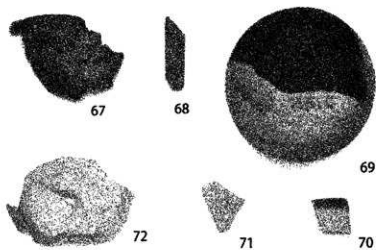




B-2地区 遺構出土遺物

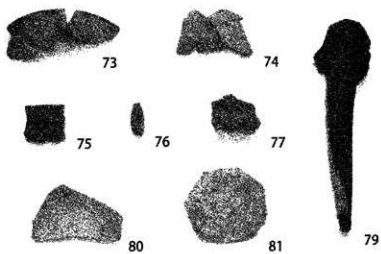


B-2地区 遺構出土遺物



B-2地区 遺構出土遺物

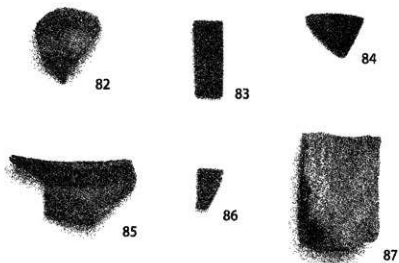
写真図版 11



B-2地区 遺構出土遺物

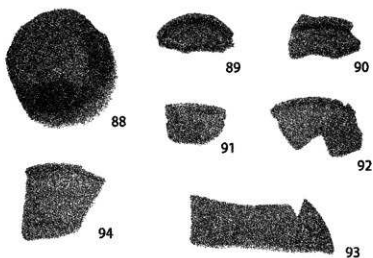


B-2地区 遺構出土遺物

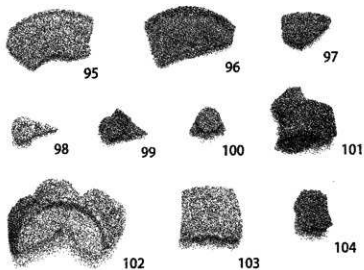


B-2地区 遺構出土遺物

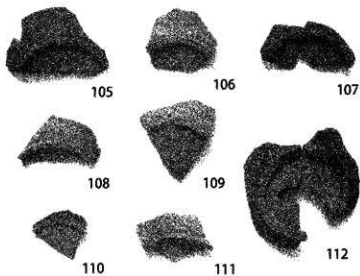
写真図版 12



B-2地区 包含層出土遺物

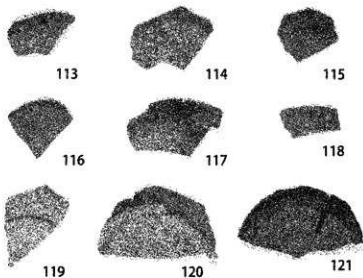


B-2地区 包含層出土遺物

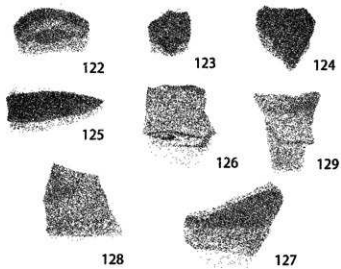


B-2地区 包含層出土遺物

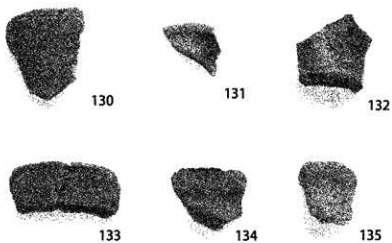
写真図版 13



B-2地区 包含層出土遺物



B-2地区 包含層出土遺物



B-2地区 包含層出土遺物

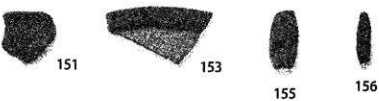
写真図版 14



B-2地区 包含層出土遺物

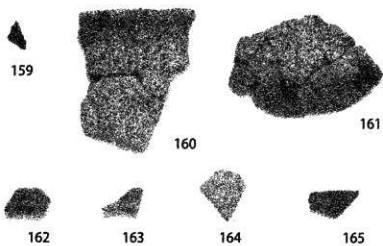


B-2地区 包含層出土遺物

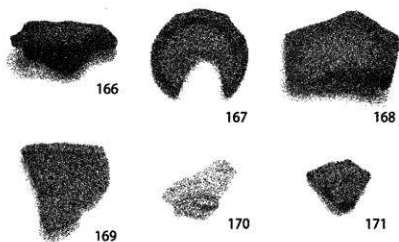


B-2地区 包含層出土遺物

写真図版 15



B-3 地区
遺構出土遺物



B-3 地区
遺構・包含層出土遺物

写真図版 16



172

173

174

175

176

177

178

179

B-4地区 遺構出土遺物

180

181

182

183

184

185

186

187

188

B-4地区 遺構出土遺物

189

191

192

190

193

194

195

196

B-4地区 遺構出土遺物

5

写真図版

写真図版 17



B-4地区 遺構出土遺物



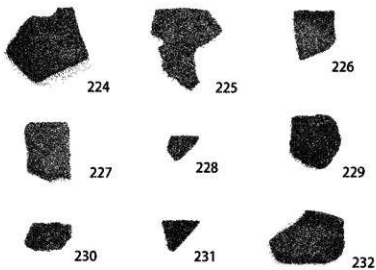
B-4地区 遺構出土遺物



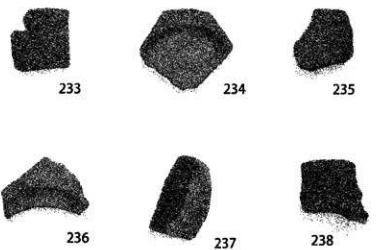
B-4地区 遺構出土遺物



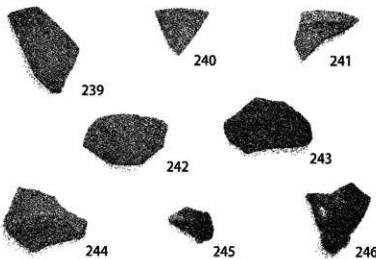
写真図版 18



B-4地区 遺構出土遺物



B-4地区 遺構出土遺物



B-4地区 遺構出土遺物

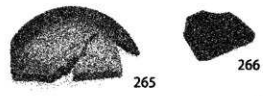
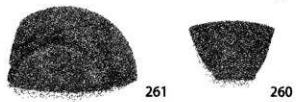
写真図版 19



B-4地区 包含層出土遺物



B-4地区 包含層出土遺物



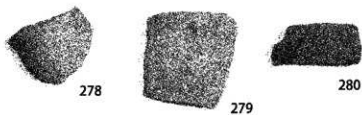
B-4地区 包含層出土遺物



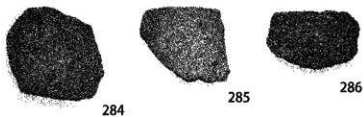
写真図版 20



B-4地区 包含層出土遺物



B-4地区 包含層出土遺物



B-4地区 包含層出土遺物

写真図版 21



B-4地区 包含層出土遺物



B-5地区
遺構・包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ぐぞういせき
書名	九歳遺跡 I
副書名	基盤整備促進事業（東沖田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査（2・4次調査）報告書
シリーズ名	南あわじ市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 18 集
編著者名	山崎裕司
編集機関	南あわじ市埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒 656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衛 1100 ℡ 0799-42-3849
発行機関	南あわじ市教育委員会
所在地	〒 656-0472 兵庫県南あわじ市市善光寺 22 番地 1 ℡ 0799-43-5232
発行年月日	令和 2（2020）年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
九歳遺跡	兵庫県 南あわじ市 阿万東町	28224	970073	34 度 12 分 40 秒	134 度 44 分 00 秒	平成 18 年 1 月 4 日～ 10 月 13 日	1,065㎡	基盤整備促進 事業（東沖地 区）に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
九歳遺跡	集落跡	縄文時代・弥生時代 飛鳥時代・奈良時代 平安時代・鎌倉時代	掘立柱建物 井戸・土坑・溝	縄文土器・弥生土器・土師器・ 須恵器・製塩土器・黒色土器・ 瓦器・瓦質土器・陶磁器・土師・ 瓦・木製品・鉄製品・石製品	

2020年3月31日発行

九歳遺跡 I

基盤整備促進事業（東沖田地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査（2・4次調査）報告書

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒 656-0455
兵庫県南あわじ市神代国衛 1100
℡ 0799-42-3849

印刷 淡路印刷株式会社

〒 656-0121
兵庫県南あわじ市山添 168 番地の 5
℡ 0799-45-1323